

社会化における絶対的愛への道

高 澤 勇

目 次

要 約

- 1 序 論
- 2 絶対的愛の定義について
 - 2.1 歴史上の愛の主要な定義について
 - 2.2 相対的愛について
 - 2.3 相対的不愛について
 - 2.4 絶対的不愛について
 - 2.5 絶対的愛について
- 3 絶対的愛の根源的障害について
 - 3.1 自我における絶対的不平等と絶対的愛の相関関係について
 - 3.2 自我における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について
 - 3.3 自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について
- 4 絶対的愛の可能性について
 - 4.1 三視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について
 - 4.2 三視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について
 - 4.3 三視点からみた絶対的愛の可能性について
- 5 絶対的愛の主要条件について
 - 5.1 無我における絶対的平等と絶対的自由の相関関係について
 - 5.2 無我における絶対的平等と絶対的愛の相関関係について
 - 5.3 無我における絶対的自由と絶対的愛の相関関係について
 - 5.4 無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係について
- 6 結 論

要 約

本稿の目標は、社会化¹⁾における絶対的愛²⁾への道を解明することである。この目標に向かって、まず第1章においては、本稿における研究の前提となる、これまでの研究結果の要約を掲げた。この研究結果に基づいて、第2章においては、「歴史上の愛の主要な定義について」を研究した。その第2章第1節においては、「キリスト教の愛の定義について」を研究した。次に、第2章第2節においては、「プラトンの愛の定義について」を研究した。第2章第3節においては、「仏教の愛の定義について」を研究した。そして第2章第4節においては、「仏教の慈悲の定義について」を研究した。

第3章においては、「絶対的愛の根源的障害について」を研究した。その第3章第1節においては、「自我における絶対的不平等³⁾と絶対的愛の相関関係について」を研究した。次に、第3章第2節においては、「自我における絶対的不自由⁴⁾と絶対的愛の相関関係について」を研究した。そして第3章第3節においては、「自我の五段階欲求⁵⁾における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。

第4章においては、「絶対的愛の可能性について」を研究した。その第4章第1節においては、「三視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」を研究した。次に、第4章第2節においては、「三視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。そして第4章第3節においては、「三視点からみた絶対的愛の可能性について」を研究した。

第5章においては、「絶対的愛の主要条件について」を研究した。その第5章第1節においては、「無我における絶対的平等⁶⁾と絶対的自由⁷⁾の相関関係について」を研究した。次に、第5章第2節においては、「無我における絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」を研究した。第5章第3節においては、「無我における絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。そして第5章第4節においては、「無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的

愛の相関関係について」を研究した。

これらの研究結果としての本稿の結論は、以下のように要約することができる。

人間の視点や生物的視点および物質的視点からみた個人の社会化における絶対的平等は、人間の本性は「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）⁸⁾「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）⁹⁾「無的主体」（仏教的見解）¹⁰⁾の縁起であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（分割不能の点的存在または無的主体）の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であり、それはまた、宇宙のすべての物質の本性と同様である、ということを知れば、宇宙のすべての人間や生物および物質は、「不生の単種単一の素粒子」（分割不能の点的存在または無的主体）であるという点において絶対的平等の存在であることを知るであろうからである。

また、人間の視点や生物的視点および物質的視点からみた個人の社会化における絶対的自由も、人間の本性は「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）「無的主体」（仏教的見解）の縁起であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、上記のように、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（分割不能の点的存在または無的主体）の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であり、それはまた、宇宙のすべての物質の本性と同様である、ということを知れば、宇宙のすべての人間や生物および物質は、「不生の単種単一の素粒子」（分割不能の点的存在または無的主体）であるという点において絶対的平等の存在であり、それゆえ、宇宙のすべての人間や生物および物質においては、この点において、いかなる上・下（拘束・被拘束、支配・被支配）の関係も誕生することが不可能になるわけであり、したがって、宇宙のすべての人間や生物および物質は、この点において、絶対的自由であることを知るであろうからである。

そして、人間の視点や生物的視点および物質的視点からみた個人の社会化に

における絶対的愛もまた、人間の本性は「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）「無的主体」（仏教的見解）の縁起であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、上記のように、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（分割不能の点的存在または無的主体）の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であり、それはまた、宇宙のすべての物質の本性と同様である、ということを知れば、宇宙のすべての人間や生物および物質は、「不生の単種単一の素粒子」（分割不能の点的存在または無的主体）であるという点において絶対的平等の存在であり、それゆえ、宇宙のすべての人間や生物および物質においては、絶対的不愛の関係が誕生することは不可能であるということを知るのである。また、ひとは、上記のように、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（分割不能の点的存在または無的主体）の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であり、それはまた、宇宙のすべての物質の本性と同様である、ということを知れば、宇宙のすべての人間や生物および物質は、「不生の単種単一の素粒子」（分割不能の点的存在または無的主体）であるという点において絶対的平等の存在であり、それゆえ、宇宙のすべての人間や生物および物質においては、いかなる上・下（拘束・被拘束、支配・被支配）の関係も誕生することが不可能になるわけであり、したがって、宇宙のすべての人間や生物および物質は、この点において、絶対的自由の存在であるので、上記の絶対的平等の存在という視点に加えて、絶対的自由の存在という視点においても、宇宙のすべての人間や生物および物質においては、絶対的不愛の関係が誕生することは不可能であるということを知るのである。そして、ひとは、宇宙のすべての人間や生物および物質において、宇宙の真実相という上記の点においては、絶対的不愛の関係が誕生することは不可能であるということを知るとき、宇宙の真実相という上記の点においては、絶対的愛の関係が誕生する可能性が生じることを知ることになるのである。

上記の、社会化における絶対的愛の純粹直観は、すべての個人の社会化にお

いて絶対的平安をもたらすであろう。また、すべての個人の社会化における絶対的平安は人類社会に絶対的平和をもたらすことになるであろう。

キーワード：社会化、絶対的平等、絶対的自由、絶対的愛、素粒子、無的主体、絶対的平安、絶対的平和

1 序 論

わたくしの社会学の主題は「人間の社会化における最終目標は何であるのか。そこに到達する道は何処にあるのか。それらを論理的に解明したい。」ということである。本稿は、この一連の研究における新しい一部分をなすものである。

この研究主題の論理的解明に向かつて、まず第1に、わたくしは、拙論「社会化の原動力—体系の大要—」を公表した。(高澤1997) そこでは、個人はなぜ社会を生み出すのかという主題の解明に主眼をおいた。¹¹⁾

第2に、わたくしは、拙論「社会化の発展」を公表した。(高澤1998) そこでは、社会化の原動力によって生み出された、個人における最初の社会化および社会はいかにして発展するのか、という主題の解明に主眼をおいた。¹²⁾

第3に、わたくしは、拙論「社会化の最終目標」を公表した。(高澤2006) そこでは、社会化の原動力によって生み出された、個人における社会化の最終目標は何であるのか、という主題の解明に主眼をおいた。¹³⁾

これに続いて、第4に、わたくしは、拙論「社会化の最終目標への道」を公表した。(高澤2009) そこでは、社会化の原動力によって生み出され、発展した、個人の社会化の最終目標への道はどのようなものであるのか、という主題の解明に主眼をおいた。¹⁴⁾

この「社会化の最終目標への道」において到達した結論は次の通りである。「社会化の最終目標は平安である。平安であるためには人生における諸々の苦痛から開放されなければならない。諸苦痛から開放されるためには、その諸苦痛が発生してくる根源を知らなければならない。その諸苦痛の根源は無明にあ

る。無明とは眞実相に対する無明である。では、眞実相とは何であるのか。眞実相すなわち宇宙（万物）の眞実相とは空である。宇宙（万物）は空であるとはどういうことであるのか。宇宙（万物）は空であるとは、宇宙（万物）は不生の素粒子（分割不能の物質または無的主体・存在）の単一体が縁起によって集合し、また離散することを繰り返して絶えることのない姿であるから、固定した実体というものがないということである。ひとは、この宇宙（万物）の眞実相を知ることによって「苦痛」から開放されて社会化の最終目標である「平安」に到達することができるのである。¹⁵⁾」（高澤2009：65-6）

さて、絶対的平安の心境とは絶対的平等・絶対的自由・絶対的愛の心境のことである。したがって、絶対的平安の心境に到達するためには絶対的平等・絶対的自由・絶対的愛の心境に到達しなければならない。では、どのようにすれば、絶対的平等・絶対的自由・絶対的愛の三者共立の境地に到達することができるのだろうか。それを知るためには、まず第1に、社会化における絶対的平等とは何であるのか、また、そこに到達する道は何処にあるのか、ということについて知らなければならない。第2に、社会化における絶対的自由とは何であるのか、また、そこに到達する道は何処にあるのか、ということについて知らなければならない。第3に、絶対的平等と絶対的自由とは両立が可能であるのか、また、両者の共立が可能であるならば、その空間は何処であるのか、ということについて知らなければならない。第4に、社会化における絶対的愛とは何であるのか、また、そこに到達する道は何処にあるのか、ということについて知らなければならない。そして、第5に、社会化における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛とは三者共立が可能であるのか、また、三者共立が可能であるならば、その空間は何処であるのか、ということについて知らなければならない。

それで、わたくしは、上記の「社会化の最終目標への道」に続いて、第5に、拙論「社会化における絶対的平等への道」を公表した。（高澤2010）そこでは、社会化における絶対的平等は如何にして可能であるのか、という主題の解明に

主眼をおいた。¹⁶⁾

さらに続いて、第6に、拙論「社会化における絶対的自由への道」を公表した。(高澤2011) そこでは、社会化における絶対的自由は如何にして可能であるのか、という主題の解明に主眼をおいた。¹⁷⁾

これに続いて、第7に、拙論「社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間」を公表した。(高澤2012) そこでは、社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間は何処であるのか、という主題の解明に主眼をおいた。

¹⁸⁾

したがって、次には、社会化における絶対的愛とは何であるのか、また、社会化における絶対的愛に到達する道は何処にあるのか、さらに、社会化における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛とは三者共立が可能であるのか、また、絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三者共立が可能であるならば、その空間は何処であるのか、ということについて解明しなければならない。

この命題の解明に先立って、ここで、歴史上に現われた周知の概念である「自由・平等・博愛」について少し述べておきたい。

この「自由・平等・博愛」という最高理念は、正確に言えば、「絶対的自由・絶対的平等・絶対的博愛」である。なぜならば、人類が意識的あるいは無意識的に求め続けているものは絶対的平安の心境であり、相対的平安の心境では不十分だからである。したがって、それは「相対的自由・相対的平等・相対的博愛」ではない。絶対的平安の心境に到達するためには、「絶対的自由・絶対的平等・絶対的博愛」の心境に到達しなければならない。「絶対的自由・絶対的平等・絶対的博愛」の心境に到達することができないにもかかわらず、絶対的平安の心境に到達するということは不可能である。

さて、「相対的自由・相対的平等・相対的博愛」という概念は、人類史上において常に顕在的に具現している。しかし、「絶対的自由・絶対的平等・絶対的博愛」という最高理念は、人類史上において顕在的に具現したことがない。では、この「絶対的自由・絶対的平等・絶対的博愛」という最高理念は何処に

あるのか。人類は、自分に与えられた人生のあらゆる時間において、また、自分の所属している集団や社会や国家において、自分に与えられた精神的・身体的諸能力を全面的に使用して、それを求め続けている。

しかし、この最高理念は、人類史の暗黒の時代に希望の光を放ち、人類の向かうべき究極目標を示し、人類の知性を導き続ける存在であったが、そこに到達できる道は見つからなかった。自我の哲学の道を歩きつづけてもそこに到達できなかった。自我の形而下学である心理学の道も、政治学の道も、また経済学の道も、そして社会学の道も、そこに到達できなかった。それは、自我意識の次元の学問では到達不能な一条の智光の源のごとき最高理念でありつづけている。

ところで、「自由・平等・博愛」の最高理念の現実化を求める政治的・経済的・社会的等の改革や革命は、人類史上に現象したあらゆる国・社会・集団において誕生と消滅を繰り返している。ここでは、有名なフランス革命をとりあげたい。周知のように、1789年にフランス革命が起こった。そのとき、革命軍は「自由・平等・博愛」の最高理念の御旗を天高く掲げて、一般庶民にとっては「不自由・不平等・不愛」のシンボルであった封建的アンシャン・レジームを崩壊させた。しかし、自由であり、平等であり、しかも博愛であることは如何にして可能であるのか。この矛盾について、ドイツの社会学者・哲学者であるG. ジンメルは、約100年前に、『社会学の根本問題』のなかで、有名なドイツの文豪であるゲーテの意見を引用しながら、次のように述べている。

まず、歴史上における自由と不自由（被拘束）に対する個人の意識の発展については、次のように述べている。

「自由一般への要求、社会そのものが個人そのものを束縛するのに用いて来た桎梏の廃棄への要求、それが極めて鋭く目覚め且つ働くようになったのは、十八世紀である。この原理的要求は、個人的利益の自由競争を世界の自然的秩序と讃えた重農主義者にあつては経済の衣裳を纏って現われ、歴史的に発展した社会が人間に加える暴行こそ一切の辛苦及び一切の悪の根源と見たルソーに

あつては感情的に洗練された姿で現われ、個人の自由を絶対者に高めて、労働者の利益擁護のための団結さえ禁じたフランス革命にあつては政治的形態として現われ、自我を認識可能な世界の基礎たらしめ、自我の絶対的自律を道徳的価値そのものたらしめたカントやフィヒテ（Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814. ドイツの哲学者）にあつては哲学的に純粋化された姿で現われている。」（ジンメル1979：101—2）

次に、個人における平等と不平等の現実の実態については、次のように述べている。

「しかし、歴史的社會によって狭められていると感じた個人の、自由への要求は、その実現に當って自己矛盾に陥る。なぜなら、言うまでもなく、この要求は、社會が全く同じ強さの、心身に全く同じ才能を恵まれた諸個人で成り立っていてこそ円滑に実現されるものであるから。しかし、この条件が満たされているところは何処にもなく、むしろ、権力を与え地位を定める人間の力は、質的にも量的にも、最初から不平等であるため、あの完全な自由は、否応なく、才能に恵まれた人間による右の不平等の利用という結果になる。愚かな人々に対して賢い人々が、弱い人々に対して強い人々が、小胆な人々に対して大胆な人々が不平等を利用する結果になる。」（ジンメル1979：103）

さらに、平等の可能性と自由の不可能性、平等と自由の両立不可能性および平等の自由に対する先行性などについては、次のように述べている。

「万人の完全な自由は、万人の完全な平等があるところに初めて生れることが出来る。しかしながら、完全な平等というのは、全く個人的のものにおいて実現され得ないのみならず、経済的なものが個人の優越性の利用を許す限り、経済的なものにおいても実現され得ない。この可能性が排除されて初めて、即ち、生産手段の私有が廃止されて初めて、ここに平等が可能になり、そして、不平等と不可分の自由の制限が除かれる。明らかに、ほかならぬ、この「可能性」という点に自由と平等との深刻な矛盾が現われている。なぜなら、この矛盾は、自由と平等とが無所有及び無権力という否定的なものへ沈下することに

よってのみ解決されるのであるから。当時、この矛盾を鋭く見抜いていたのはゲーテだけであったかと思う。彼によれば、平等は一般的規範への服従を求め、自由は「無拘束へ向う。」「立法者にしろ、革命家にしろ、平等と自由とを同時に約束する者は、夢想家か山師である。」恐らく、こういう事態を救おうという本能が働いたのであろう、本能は、自由及び平等に第三者の要求として友愛を加えさせた。なぜなら、自由と平等との矛盾を除去するのに強制という手段を認めないとすれば、除去の効果を挙げるには、公然たる利他主義しかないから、即ち、自由が平等を亡ぼしてしまった以上、天賦の才能の発揮を道徳的に断念することだけが平等を回復する道になる。」(ジンメル1979: 104—5)

では、ドイツの社会学者・哲学者であるジンメルやドイツの文豪ゲーテが賢くも指摘したように、「自由・平等・博愛」は人類史上において常に支配され続けてきた無数の人々が切実に希望する理念の並列に過ぎないのであろうか。それらは実現不能の希望的理念でしかないのか。自由であり、平等であり、しかも博愛であることは人間社会において永遠に不可能なことなのであろうか。

この人間社会に誕生し、すべての時代のすべての社会において生きてきたすべての人々において、常にその実現が意識的・無意識的に希求され続けてきたであろう「自由・平等・博愛」への道の可能性を解明することは、冒頭に述べた、わたくしの社会学の主題である「人間の社会化における最終目標は何であるのか。また、そこに到達する道はどこにあるのか。それらを論理的に解明したい。」という研究の最終目標としての「絶対的平安の心境」の純粹直観に到達する大道の価値を現実社会的存在の視点において理解するために必要不可欠である。そこで、既に触れた拙論「社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間」において解明した、社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間は何処にあるのか、という命題の解明に続いて、ここでは、人間の社会化における絶対的愛とは何であるのか、また、社会化における絶対的愛に到達する道は何処にあるのか、さらに、社会化における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛とは三者共立が可能であるのか、また、三者共立が可能である

ならば、その空間は何処にあるのか、という命題を解明したいのであるが、思考及び執筆の順序として、まず本稿の主題である「社会化における絶対的愛への道」を解明しなければならない。したがって、別言すれば、「社会化における絶対的愛とは何であるのか。また、そこに到達する道は何処にあるのか」という命題を解明することが本稿の主題である。

2 絶対的愛の定義について

本稿の目標は、社会化における絶対的愛への道を解明することである。この目標に向かって、この第2章においては、「絶対的愛の定義について」を研究する。まず第1節では、「歴史上の愛の主要な定義について」を研究する。第2節では、「相対的愛について」を研究する。第3節では、「相対的不愛について」を研究する。第4節では、「絶対的不愛について」を研究する。そして第5節では、「絶対的愛について」を研究する。

2・1 歴史上の愛の主要な定義について

本節の目標は、歴史上の愛の定義はどのようなものであるのかについて解明することである。この目標に向かって、まず第1項では、「キリスト教の愛の定義について」を研究する。第2項では、「プラトンの愛の定義について」を研究する。第3項では、「仏教の愛の定義について」を研究する。そして第4項では、「仏教の慈悲の定義について」を研究する。

2・1・1 キリスト教の愛について

本項の目標は、キリスト教の愛とは如何なるものであるのか、という命題を解明することである。しかし、この難解なテーマについて、ここで専門的に研

究するつもりはないのである。絶対的愛の定義に関わる最小限の知識について触れておきたいのである。

『広辞苑第六版』によれば、キリスト教の愛であるアガペーについては次のように述べられている。

アガペー (agape ギリシャ)

神の愛。神が罪人たる人間に対して一方的に恩寵を与える行為で、キリストの自己犠牲的な愛として新約聖書にあらわれた思想。(新村2008)

さて、キリスト教における最も有名な愛であるアガペーが上記の内容であるならば、アガペーは、神によって創造された人間に対する神の愛であるから、アガペーという概念には、いうまでもなく、人間に対する人間の愛、生物に対する人間の愛、物質に対する人間の愛そして神に対する人間の愛など、人間の愛は一切含まれていない。

したがって、アガペーという概念は、後に、第2章第2節「相対的愛について」において述べる相対的愛の概念に属さない。また、それは、後に、第2章第3節「相対的不愛について」において述べる相対的不愛の概念にも属さない。さらに、それは、後に、第2章第4節「絶対的不愛について」において述べる絶対的不愛の概念にも属さない。そして、最後に、それは、後に、第2章第5節「絶対的愛について」において述べる絶対的愛の概念にも属さない。

2・1・2 プラトンの愛について

本項の目標は、プラトンの愛とは如何なるものであるのか、という命題を解明することである。しかし、上記の「キリスト教の愛について」と同様に、この難解なテーマについて、ここで専門的に研究するつもりはないのである。絶対的愛の定義に関わる最小限の知識について触れておきたいのである。

『広辞苑第六版』によれば、プラトンの愛であるエロスについては次のよう

に述べられている。

エロス (Eros)

愛。欠けたものへの渴望がその本質であり、普通には恋愛・性愛の意味であるが、プラトンは肉欲から始まり、愛の上昇の種々の段階を説き、最高の純粋な愛は美のアイデアに対するあこがれであるとし、エロスは真善美に到達しようとする哲学的衝動を意味すると説く。(新村2008)

さて、ギリシャの有名な三大哲学者ソクラテス、プラトン、アリストテレスの中の、ドイツの有名な哲学者ショウペンハウアーが「神のようなプラトン¹⁹⁾」と賞賛した、そのプラトンの有名な愛であるエロスは、上記のように、欠けたものへの渴望（別言すれば、完全無欠のものへの渴望）がその本質である。それゆえに、エロスの最終目標である、最高の純粋な愛は「美のアイデア」（別言すれば、「完全無欠の美」または「絶対的美」）に対するあこがれとなる。この「美のアイデア」（「完全無欠の美」または「絶対的美」）は何処にあるのか。それは「真善美」（別言すれば、「完全無欠の真」または「絶対的真」、「完全無欠の善」または「絶対的善」、「完全無欠の美」または「絶対的美」）である。したがって、エロスはその「真善美」という「美のアイデア」（別言すれば、「完全無欠の真」または「絶対的真」や「完全無欠の善」または「絶対的善」をその内に含む「完全無欠の美」または「絶対的美」）に到達しようとする哲学的衝動を意味するのである。

上記の「美のアイデア」の内容にあたる「真善美」の中の「真」（真理）のアイデアを、三者の中の最も重要にして、かつ他の二者である「善美」のアイデアの成立を絶対的に可能にする「宇宙の真実相」と同義であると解釈するならば、プラトンのエロスの最高の純粋な愛は、後に、第2章第1節第4項「仏教の慈悲について」の中の「三縁慈悲」において述べる「無縁（空の理を対象とする）の慈悲」と同様の意味を持つものである。

したがって、プラトンのエロスの最高の純粋な愛は、後に、第2章第5節

「絶対的愛について」において述べる絶対的愛の概念に属するものである。

2・1・3 仏教の愛について

本項の目標は、仏教の愛²⁰⁾とは如何なるものであるのか、という命題を解明することである。しかし、上記の「キリスト教の愛について」および「プラトンの愛について」と同様に、この難解なテーマについて専門的に研究するつもりはないのである。絶対的愛の定義に関わる最小限の知識について触れておきたいのである。すなわち妄執（渴愛）について触れておきたいのである。

仏教では、諸苦の原因を探究した理論として十二の項目よりなる縁起説がある。いわゆる十二縁起説である。

苦の原因を求める方法では、次のようになる。

(1) 老い死ぬこと（老死）→ (2) 生れること（生）→ (3) 生存（有）→ (4) 執着（取）→ (5) 妄執（渴愛）→ (6) 感受（受）→ (7) 接触（触）→ (8) 六つの領域（六入）→ (9) 名称と形態（名色）→ (10) 認識作用（識）→ (11) 潜在的形成力（行）→ (12) 真実相の無知（無明）

反対に、上記の第1原因から帰結を求める方法では、次のようになる。

(1) 真実相の無知（無明）→ (2) 潜在的形成力（行）→ (3) 認識作用（識）→ (4) 名称と形態（名色）→ (5) 六つの領域（六入）→ (6) 接触（触）→ (7) 感受（受）→ (8) 妄執（渴愛）→ (9) 執着（取）→ (10) 生存（有）→ (11) 生れること（生）→ (12) 老い死ぬこと（老死）

上記の「妄執（渴愛）」は苦の第8原因になっている。したがって、仏教における愛は苦痛をもたらす原因として位置づけられているのである。（中村 1994a : 440-1）

さて、仏教における愛は、上記のように、妄執（渴愛）として十二縁起説における苦の第8原因になっている。

したがって、仏教における愛は、後に、第2章第2節「相対的愛について」

において述べる相対的愛の概念に属する。また、それは、後に、第2章第3節「相対的不愛について」において述べる相対的不愛の概念に属する。それゆえ、仏教における愛は、絶対的愛の概念に属するものではないのである。

2・1・4 仏教の慈悲について

本項の目標は、仏教の慈悲²¹⁾とは如何なるものであるのか、という命題を解明することである。しかし、上記の「キリスト教の愛について」「プラトンの愛について」および「仏教の愛について」と同様に、この難解なテーマについて専門的に研究するつもりはないのである。絶対的愛の定義に関わる最小限の知識について触れておきたいのである。

『広説佛教語大辞典』によれば、仏教の慈悲については次のように述べられている。

① 慈悲

<1> 仏・菩薩が衆生をあわれみ、いつくしむ心。あわれみの心。万人に対する愛。いつくしみと同情。

<2> 衆生に樂を与える慈 (*maitri*) と、衆生の苦を抜く悲 (*karuna*) とをいう。慈の言語は多くの場合 (*maitri*) であるが、それは *mitra* (友) という語からつくられた抽象名詞で、最高の友情とでもいうべきもの。特定の人に対してではなく、すべての人びとに友情をもつことが慈である。また、*karuna* の原意は悲しい気持ちをともにすることであり、従って他人に対するあわれみ、同情を意味する。(中村2001b)

② 三縁慈悲

慈悲の三種類の対象。慈悲心には三種類がある。(1) 衆生縁(衆生を対象とする)の慈悲、(2) 法縁(個体を構成する諸法、すなわち諸の要素を対象とする)の慈悲、(3) 無縁(空の理を対象とする)の慈

悲、とである。最後のものが絶対の慈悲である。(中村2001a)

さて、上記の「三縁慈悲」と相対的愛の相関関係、「三縁慈悲」と相対的不愛の相関関係、「三縁慈悲」と絶対的不愛の相関関係および「三縁慈悲」と絶対的愛の相関関係については、後の、第2章第2節「相対的愛について」、第2章第3節「相対的不愛について」、第2章第4節「絶対的不愛について」および第2章第5節「絶対的愛について」において述べる。

2・2 相対的愛について

本項の目標は、相対的愛^{2.2)}とは如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

さて、相対的愛とは、上記の三縁慈悲を利用していうならば、(1)衆生縁(衆生を対象とする)の慈悲、および(2)法縁(個体を構成する諸法、すなわち諸の要素を対象とする)の慈悲、である。別言すれば、(1)衆生を対象とする友情と同情、および(2)個体を構成する諸法、すなわち諸の要素を対象とする友情と同情、である。また、別言すれば、人間・生物・物質に対する友情と同情である。

2・3 相対的不愛について

本節の目標は、相対的不愛^{2.3)}とは如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

上記第2章第2節において触れた相対的愛に対して、相対的不愛とは、上記の三縁慈悲を利用していうならば、(1)人間が行う衆生縁(衆生を対象とする)の不慈不悲、および(2)人間が行う法縁(個体を構成する諸法、すなわち諸の要素を対象とする)の不慈不悲、である。別言すれば、(1)衆生を対象とする非友情と非同情、および(2)個体を構成する諸法、すなわち諸の要

素を対象とする非友情と非同情、である。また、別言すれば、人間・生物・物質に対する非友情と非同情である。

2・4 絶対的不愛について

本節の目標は、絶対的不愛とは如何なるものであるのか、という命題を説明することである。

上記第2章第3節において触れた相対的不愛に対して、絶対的不愛とは、上記の三縁慈悲を利用していうならば、(1) 人間が行う自分以外のすべての衆生縁(自分以外のすべての衆生を対象とする)の不慈不悲、および(2) 人間が行う自分以外のすべての法縁(自分以外のすべての個体を構成する諸法、すなわち諸の要素を対象とする)の不慈不悲、である。別言すれば、(1) 自分以外のすべての衆生を対象とする非友情と非同情、および(2) 自分以外のすべての個体を構成する諸法、すなわち諸の要素を対象とする非友情と非同情、である。また、別言すれば、自分以外のすべての人間・生物・物質に対する非友情と非同情である。

2・5 絶対的愛について

本節の目標は、絶対的愛とは如何なるものであるのか、という命題を説明することである。

上記の相対的愛と相対的不愛および絶対的不愛に対して、絶対的愛とは、上記の三縁慈悲を利用していうならば、(3) 無縁(空の理を対象とする)の慈悲である。別言すれば、(3) 空の理を対象とする友情と同情である。また、別言すれば、人間・生物・物質を構成する素粒子の集合・離散の姿に対する友情と同情である。さらに、別言すれば、宇宙のすべての物質の本来の姿は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」

(数学的・幾何学的見解) または「無的主体」(仏教的見解) が集合・離散している姿であるという宇宙の真実相に対する友情と同情である。

3 絶対的愛の根源的障害について

本稿の目標は、社会化における絶対的愛への道を解明することである。この目標に向かって、この第3章においては、「絶対的愛の根源的障害について」を研究する。まず第1節では、「自我における絶対的不平等と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第2節では、「自我における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。そして第3節では、「自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。

3・1 自我における絶対的不平等と絶対的愛の相関関係について

自我における絶対的不平等と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本節の目標である。

この目標に向かって、まず第1項では、「自我における絶対的不平等の証明」を研究する。第2項では、「自我における絶対的不平等の現実と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第3項では、「自我における絶対的不平等の正と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第4項では、「自我における相対的不平等の結果と絶対的愛の相関関係について」を研究する。そして第5項では、「自我における相対的平等の可能性と絶対的愛の相関関係について」を研究する。

3・1・1 自我における絶対的不平等の証明

自我における絶対的不平等は如何なるものであるのか。この命題を解明する

ことが本項の目標である²⁴⁾。

人間は、個人対個人という視点から人類史上において誕生した全ての人間を見れば、いかなる二者においても絶対的に不平等である。

人類史上という時間上において全く同一の年・月・日・時・分・秒に誕生した人数は少ない。

その同一の年・月・日・時・分・秒に誕生した人々のなかで、同じ親から同時に誕生した一卵性複数生児の人数ははるかに少ない。

その同じ親から同時に誕生した一卵性複数生児の人々のなかで、一定の親から同時に誕生した一卵性複数生児の人数は一般的には多くても数名である。

その一定の親から同時に誕生した一卵性複数生児の人々のなかでも、一定の個人と同数の、また同内容の細胞を同時に所有している別の個人はいないと考えてよいであろう。

この程度の常識的レベルにおいてさえも、生物学的側面から人類史上において誕生した全ての人間を比較して見れば、いかなる二者においても絶対的に不平等である。

したがって、誰もが知っているように、人類史上のどのような年・月・日・時・分・秒においても一定の個人と同様の個人は存在しないのである。

この絶対的不平等の身体に属する五官である眼・耳・鼻・舌・身は絶対的不平等である。また、この五官に対応する五感である色・声・香・味・触も絶対的不平等である。さらに、この五感から生じてくる意識とその記憶もまた絶対的不平等である。そして、この意識とその記憶を自分のものとして統括する自我もまた絶対的不平等である。

したがって、「自我における絶対的不平等は如何なるものであるのか。」という冒頭の命題の解明は、要約すると以下ようになる。

絶対的不平等の身体から生じる五官および五感は共に絶対的不平等であり、その五感から生じる意識とその記憶もまた絶対的不平等である。そして、その意識とその記憶を自分のものとして統括する自我もまた絶対的不平等である。

さて、人間の自我における絶対的不平等は、いかにして人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生を阻害するのであろうか。

3・1・2 自我における相対的不平等の現実と絶対的愛の相関関係について

自我における相対的不平等の現実と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。²⁵⁾

さて、ひとは誰でも生まれながらに相対的に不平等である。また、ひとは誰でも人間社会の中で生きている間ずっと死ぬまで相対的に不平等である。

人類には皮膚の色が異なる人種がある。白色人種・黒色人種・黄色人種がある。美女・醜女がいる。美女も無数の段階にランク付けされる。醜女もまた無数の段階にランク付けされる。記憶力の良い人と悪い人がある。記憶力の良い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。記憶力の悪い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。いわゆる頭の良い人と悪い人がある。頭の良い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。頭の悪い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。高学歴の人と低学歴の人とがいる。高学歴の人の中でも、その程度において多数の段階にランク付けされる。低学歴の人の中でも、その程度において多数の段階にランク付けされる。富裕な家庭に生まれた人がある。貧乏な家庭に生まれた人もいる。富裕な家庭に生まれた人の中でも、その程度において多数の段階にランク付けされる。貧乏な家庭に生まれた人の中でも、その程度において多数の段階にランク付けされる。このように、ひとは人間社会に生まれたときから、死ぬまで絶えることなく相対的に不平等である。

このような人間関係の社会の中から絶対的愛の社会関係は誕生することができるであろうか。むしろ、このような人間関係からは、他者に対する不愛の類の感情が生みだされるのではないだろうか。

3・1・3 自我における相対的不平等の是正と絶対的愛の相関関係について

自我における相対的不平等の是正と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。²⁶⁾

さて、この相関関係を解明するのに先立って、ひとは自我における相対的不平等の是正（別言すれば、自我における相対的自由）を求めているのであろうか、という命題について解明しなければならない。

ひとは、自分が第3章第1節第2項で述べた各種の相対的不平等およびその他のすべての相対的不平等の下位にいる場合には、自分より上位にいる人に対して相対的不平等の是正を求めるであろう。

ここからは下位者の上位者に対する憎しみ・嫉妬・嫌悪など不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

しかし、ひとは、自分が上記の各種の相対的不平等の上位にいる場合には、自分より下位にいる人に対して相対的不平等の是正を求めないであろう。

ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

これを結論的にいえば、ひとは、自分が上記の各種の相対的不平等およびその他のすべての相対的不平等の最下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的不平等の是正を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が上記の各種の相対的不平等およびその他のすべての相対的不平等の最上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的不平等の是正を求めないであろう。

したがって、「ひとは自我における相対的不平等の是正を求めているのであろうか。」という冒頭の命題の解明は次のようになるであろう。

ひとは、自分がすべての相対的不平等の中の一種類だけの相対的不平等であっても、その下位にいる場合には、自分より上位にいる、その一種類の相対的不平等を現象させているすべての人に対して相対的不平等の是正を求めるであろう。

上記のように、ここからは下位者の上位者に対する憎しみ・嫉妬・嫌悪など不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

しかし、ひとは、自分がすべての相対的不平等の中の一種類だけの相対的不平等であっても、その上位にいる場合には、自分より下位にいる、その一種類の相対的不平等を現象させているすべての人に対して相対的不平等の是正を求めないであろう。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

もう少し詳細に、また、結論的に言えば、次のようになるであろう。

(1) ひと（自我）は、一面においては、徹頭徹尾、相対的不平等の是正を求めている。上記のように、ここからは下位者の上位者に対する憎しみ・嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

1) ひととは、ある相対的不平等の下位にいるときは、自分より上位にいるひとに対して相対的不平等の是正を求めている。

2) すべての相対的不平等の最上位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最上位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、その種類において程度は異なるとしても、何らかの相対的不平等の是正を求めていることになるのである。

(2) ひと（自我）は、他面においては、徹頭徹尾、相対的不平等を求めている。上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの不愛の類の感情が生みだされる。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

1) ひととは、ある相対的不平等の上位にいるときは、自分より下位にいるひとに対して相対的不平等の是正を求めている。別言すれば、ひととは、ある相対的不平等の上位にいるときは、自分より下位にいるひとに対して相対的不平等を求めているともいえる。

2) すべての相対的不平等の最下位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不平等の下位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不平等の是正を求めていることになる。別言すれば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不平等の下位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不平等を求めているともいえるのである。

3・1・4 自我における相対的不平等の結果と絶対的愛の相関関係について

自我における相対的不平等の結果と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。²⁷⁾

さて、この相関関係を解明するのに先立って、自我における相対的不平等の結果は如何なるものであるのか、という命題について解明しなければならない。

さて、①相対的不平等の上位者は相対的不平等の是正を求めない。②相対的不平等の下位者は相対的不平等の是正を求める。このように仮定するならば、

①相対的不平等の上位者は相対的不平等の現実社会の是正を求めない。②相対的不平等の下位者は相対的不平等の現実社会の是正を求める。ということになる。

ところで、既に触れたように、「すべての相対的不平等の最上位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最上位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不平等の上位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不平等の是正を求めていることになるのである。」ということになる。すると、相対的不平等の最上位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不平等の上位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不平等の現実社会の是正を求めていることになるのである。

上記のように、ここからは下位者の上位者に対する憎しみ・嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

このように考えると、現実社会に対する人類の不平不満の数量は、膨大なものになるであろう。現存する数十億人の人間の相対的不平等の現実社会に対する不平不満を述べれば無数となるであろう。こうした相対的不平等を是正しようとする力と同程度の抑止力が作用することによって、相対的不平等がもたらす歴史的・社会的問題は容易には解決することができないであろう。

既に、第3章第1節第2項「自我における相対的不平等の現実と絶対的愛の相関関係について」で述べた相対的不平等の種類との関係で述べるならば、次の歴史的・社会的問題を挙げることができる。

① 白人の黒人差別・蔑視の問題

人類には皮膚の色が異なる人種がいる。白色人種・黒色人種・黄色人種がある。この肌の色の相違から、あってはならない暴力の人種差別が人類史の過去において行われ、現在においても行われている。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの不愛の類の感情が生み出される。また、下位者の上位者に対する憎しみ、嫉妬、羨望などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

② 美女の醜女差別・蔑視の問題

美女・醜女がいる。美女も無数にランク付けられる。醜女もまた無数にランク付けられる。そして、美女度の上位に位置する人は、美女度の下位に位置する人に対して差別・蔑視する。それゆえ、醜女意識のある人は、美女度を上げるために一生懸命に努力しているのである。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの不愛の類の感情が生み出される。また、下位者の上位者に対する憎しみ、嫉妬、羨望などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

③ 記憶力の良い人の記憶力の悪い人に対する差別・蔑視の問題

記憶力の良い人と悪い人がある。記憶力の良い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。記憶力の悪い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、記憶力の良い人は、記憶力の悪い人に対して差別・蔑視する。それゆえ、記憶力の悪い人は、知識をより多く記憶するために一生懸命に努力しているのである。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの不愛の類の感情が生み出される。また、下位者の上位者に対する憎しみ、嫉妬、羨望などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

④ 頭の良い人の頭の悪い人に対する差別・蔑視の問題

いわゆる頭の良い人と悪い人がある。頭の良い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。頭の悪い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、頭の良い人は、頭の悪い人に対して差別・蔑視する。

それゆえ、頭の悪い人は、頭を良くするために知識をより多く記憶しようと一生懸命に努力しているのである。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの不愛の類の感情が生み出される。また、下位者の上位者に対する憎しみ、嫉妬、羨望などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

⑤ 高学歴の人の低学歴の人に対する差別・蔑視の問題

高学歴の人と低学歴の人とがいる。高学歴の人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。低学歴の人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、高学歴の人は、低学歴の人に対して差別・蔑視する。それゆえ、ひとは高学歴を身につけようと、少しでもレベルの高い大学への合格を目指して必死に努力するのである。しかし、才能不足・努力不足等により、低学歴のままで生きていかねばならない人は、高学歴の人に負けないように自分に与えられた能力を開発しながら一生懸命に努力しているのである。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの不愛の類の感情が生み出される。また、下位者の上位者に対する憎しみ、嫉妬、羨望などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

⑥ 富裕な家庭に生まれた人の貧乏な家庭に生まれた人に対する差別・蔑視の問題

富裕な家庭に生まれた人がある。貧乏な家庭に生まれた人もいる。富裕な家庭に生まれた人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。貧乏な家庭に生まれた人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、富裕な家庭に生まれた人は、貧乏な家庭に生まれた人に対して差別・蔑視する。それゆえ、ひとは富裕な家庭に生まれた人のように、お金持ちになるように一生懸命に努力しているのである。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑など

の不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

上記の、相対的不平等がもたらす結果の他にも非常に多くの問題がある。

しかし、こうした現存する数十億人の人間の相対的不平等の現実社会に対する無数の不平不満の膨大なエネルギーの爆発を抑制している力が他方にある。

既に触れたように、「すべての相対的不平等の最下位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不平等の下位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不平等の是正を求めていることになるのである。」ということになる。すると、相対的不平等の最下位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不平等の下位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不平等の現実社会の是正を求めていることになるのである。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの不愛の類の感情が生み出される。また、下位者の上位者に対する憎しみ、嫉妬、羨望などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

このように考えると、現実社会に対する人類の不平不満を抑止する数量は、膨大なものになるであろう。現存する数十億人の人間の相対的不平等の現実社会に対する不平不満を抑止する意見を述べれば無数となるであろう。

3・1・5 自我における相対的平等の可能性と絶対的愛の関係について

自我における相対的平等の可能性と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。²⁸⁾

この因果関係を解明することに先立って、自我における相対的平等は可能であるか、という命題を解明しなければならない。

既に詳細については第3章第1節第3項において述べたことであるが、まず第1に、相対的平等（相対的不平等の是正）を100%求めている人は、すべての相対的不平等において最下位にある1人（単数）である。反対に、相対的平等（相対的不平等の是正）を100%求めていない人は、すべての相対的不平等において最上位にある1人（単数）である。第3に、相対的平等（相対的不平等の是正）を求めているすべての人の上限を、先の第1に述べた、すべての相対的不平等において最下位にある1人（単数）として、その要求度を100%と仮定する。次に、相対的平等（相対的不平等の是正）を求めているすべての人の下限を、先の第2に述べた、すべての相対的不平等において最上位にある1人（単数）として、その要求度を0%と仮定する。すると、すべての人間が自分の所属する社会において相対的平等（相対的不平等の是正）を求める程度（要求度）は、上記の最上位の1人を除けば、1%以上100%以下となる。別言すれば、現存する全人類の相対的平等（相対的不平等の是正）を求める程度（要求度）は、上記の最上位の1人を除けば、この範囲内にある。

これも、既に第3章において触れたように、ひとは、自分が各種の不平等の下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が各種の不平等の上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めないであろう。

つまり、ひとは、すべての相対的不平等の最上位者になりたいのである。そして、ひとは、すべての相対的不平等の最下位者には絶対になりたくないのである。

これを別言するならば、ひとは、誰でも、支配—服従（被支配）の人間社会・集団における上下関係・権力関係の支配者的存在になりたいという欲求をもっているのであって、服従者（被支配者）・奴隸的存在には絶対になりたく

ないと思っているのではないだろうか。

したがって、「自我における相対的平等は可能であるか。」という命題を解明すると、「自我における相対的平等は不可能である。」という結論になる。

この結論を、絶対的愛との関係で述べるならば、次のようになるであろう。

自我における相対的平等が不可能であるならば、ここからは、一方において、下位者の上位者に対する憎しみ・嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情が生み出される。また、他方において、上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・輕蔑などの不愛の類の感情が生み出される。これらの感情は共に人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

3・2 自我における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について

自我における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本節の目標である。

この目標に向かって、まず第1項では、「自我における絶対的不自由の証明」を研究する。第2項では、「自我における相対的不自由の現実と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第3項では、「自我における相対的不自由の是正と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第4項では、「自我における相対的不自由の結果と絶対的愛の相関関係について」を研究する。そして第5項では、「自我における相対的自由の可能性と絶対的愛の相関関係について」を研究する。

3・2・1 自我における絶対的不自由の証明

自我における絶対的不自由は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。²⁹⁾

既に、第3章第1節第1項「自我における絶対的不平等の証明」において証

明したように、人間は自我においては絶対的不平等である。また、自我における絶対的不平等は如何なるものであるのか、という命題の解明は、要約すると以下ようになる。

絶対的不平等の身体から生じる五官および五感と共に絶対的不平等であり、その五感から生じる意識とその記憶もまた絶対的不平等である。そして、その意識とその記憶を自分のものとして統括する自我もまた絶対的不平等である。

さて、人間が自我において絶対的不平等であるならば、人間は自我において絶対的不自由である。なぜならば、人間が自我において絶対的不平等であるということは、個人と個人との間に大・小の関係、上・下の関係、支配・被支配の関係、などの社会的関係が発生する可能性があるからである。

それでは、人間の自我における絶対的不自由は、いかにして人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生を阻害するのであろうか。

3・2・2 自我における相対的不自由の現実と絶対的愛の相関関係について

自我における相対的不自由の現実と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。³⁰⁾

ところで、ここで用いる具体例としては、拙論「社会化における絶対的平等への道」の第2章で用いたものを要約した形で本稿の第3章第1節第1項「自我における相対的不平等の現実と絶対的愛の相関関係について」に掲げたものをできるかぎり使用することで、「自我における相対的不平等の現実」との比較を可能にしたいと思う。

さて、ひとは誰でも生まれながらに相対的に不自由である。また、ひとは誰でも人間社会の中で生きている間ずっと死ぬまで相対的に不自由である。

美女と醜女がいる。美女は無数の段階にランク付けされる。醜女もまた無数の段階にランク付けされる。美女は恋愛相手や結婚相手を選択する場合に醜女

よりも自由である。美女は醜女よりも相手の選択肢が多い。これに対して、醜女は恋愛相手や結婚相手を選択する場合に美女よりも不自由である。醜女は美女よりも相手の選択肢が少ない。他の要素が加わるので正確には言えないけれども、一般的に言えば、上位の美女であるほど恋愛相手や結婚相手を選択する場合に相手（男）の選択肢が多い。最上位の美女は恋愛相手や結婚相手を選択する場合に相手（男）の選択肢が最も多い。反対に、下位の醜女であるほど恋愛相手や結婚相手を選択する場合に相手（男）の選択肢が少ない。最下位の醜女は恋愛相手や結婚相手を選択する場合に相手（男）の選択肢が最も少ない。こうした視点からみれば、最下位の醜女は恋愛相手や結婚相手を選択する場合に相手（男）の選択肢が最も少ないという理由で、この点においては、最も不自由である。反対に、最上位の美女は恋愛相手や結婚相手を選択する場合に相手（男）の選択肢が最も多いという理由で、この点においては、最も自由である。こうした視点からみれば、恋愛相手や結婚相手を選択する場合に最上位の美女より下位的女子はその美女率が低いほどそれに比例して自由の程度が低下する。別言すれば、最上位の美女より下位的女子はその醜女率が高いほどそれに比例して不自由である。そして、最上位の美女は常にその最高の美女率を維持できるわけではない。最上位の美女も高齢化やその他の要因によって最高の美女率の座を第2位の美女に明け渡さなければならない。上記のことは男性においても同様であろう。このように考えるならば、前述のごとく、ひとは誰でも生まれながらに相対的に不自由である。また、ひとは誰でも人間社会の中で生きている間ずっと死ぬまで相対的に不自由である。

また、記憶力の良い人と悪い人がいる。記憶力の良い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。記憶力の悪い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。記憶力の良い人は就職先を選択する場合に記憶力の悪い人よりも自由である。記憶力の良い人は記憶力の悪い人よりも就職先相手の選択肢が多い。これに対して、記憶力の悪い人は記憶力の良い人よりも不自由である。記憶力の悪い人は記憶力の良い人よりも就職先相手

の選択肢が少ない。他の要素が加わるので正確には言えないけれども、一般的に言えば、上位の記憶力所有者であるほど就職先相手を選択する場合に相手の選択肢が多い。最上位の記憶力所有者は就職先相手を選択する場合に相手の選択肢が最も多い。反対に、下位の記憶力所有者であるほど就職先相手を選択する場合に相手の選択肢が少ない。最下位の記憶力所有者は就職先相手を選択する場合に相手の選択肢が最も少ない。こうした視点からみれば、最下位の記憶力所有者は就職先相手を選択する場合に相手の選択肢が最も少ないという理由で、この点においては、最も不自由である。反対に、最上位の記憶力所有者は就職先相手を選択する場合に相手の選択肢が最も多いという理由で、この点においては、最も自由である。こうした視点からみれば、就職先相手を選択する場合に最上位の記憶力所有者より下位の記憶力所有者はその記憶力が小さいほど、それに比例して自由の程度が低下する。別言すれば、最上位の記憶力所有者より下位の記憶力所有者はその忘却力が大きいほどそれに比例して不自由である。そして、最上位の記憶力所有者は常にその最高の記憶力を維持できるわけではない。最上位の記憶力所有者も高齢化や病気やその他の要因によって最高の記憶力の座を第2位の記憶力所有者に明け渡さなければならない。このように考えるならば、前述のごとく、ひとは誰でも生まれながらに相対的に不自由である。また、ひとは誰でも人間社会の中で生きている間ずっと死ぬまで相対的に不自由である。

富裕者と貧困者がいる。富裕者は無数の段階にランク付けされる。貧困者もまた無数の段階にランク付けされる。富裕者は高級品を選択する場合に貧困者よりも自由である。富裕者は貧困者よりも高級品の選択肢が多い。これに対して、貧困者は高級品を選択する場合に富裕者よりも不自由である。貧困者は富裕者よりも高級品の選択肢が少ない。他の要素が加わるので正確には言えないけれども、一般的に言えば、上位の富裕者であるほど高級品を選択する場合に高級品の選択肢が多い。最上位の富裕者は高級品を選択する場合に高級品の選択肢が最も多い。反対に、下位の貧困者であるほど高級品を選択する場合に高

級品の選択肢が少ない。最下位の貧困者は高級品を選択する場合に高級品を選択肢が最も少ない。こうした視点からみれば、最下位の貧困者は高級品を選択する場合に高級品を選択肢が最も少ないという理由で、この点においては、最も不自由である。反対に、最上位の富裕者は高級品を選択する場合に高級品を選択肢が最も多いという理由で、この点においては、最も自由である。こうした視点からみれば、高級品を選択する場合に最上位の富裕者より下位の富裕者はその富裕率が低いほどそれに比例して自由の程度が低下する。別言すれば、最上位の富裕者より下位の富裕者はその貧困率が高いほどそれに比例して不自由である。そして、最上位の富裕者は、常にその最高の富裕率を維持できるわけではない。最上位の富裕者も高齢化や浪費やその他の要因によって最高の富裕率の座を第2位の富裕者に明け渡さなければならない。このように考えるならば、前述のごとく、ひとは誰でも生まれながらに相対的に不自由である。また、ひとは誰でも人間社会の中で生きている間ずっと死ぬまで相対的に不自由である。

このような人間関係の社会の中から絶対的愛の社会関係が生れることができるであろうか。むしろ、このような人間関係からは、他者に対する不愛の類の感情が生みだされるのではないであろうか。

3・2・3 自我における相対的不自由の是正と絶対的愛の相関関係について

自我における相対的不自由の是正と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。³¹⁾

さて、ひとは自我における相対的不自由の是正（別言すれば、自我における相対的自由）を求めているのであろうか。まず、この命題を解明しなければならない。

ひとは、自分が上記の各種の相対的不自由およびその他のすべての相対的不

自由の下位にいる場合には、自分より上位にいる人に対して相対的不自由の是正を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が上記の各種の相対的不自由の上位にいる場合には、自分より下位にいる人に対して相対的不自由の是正を求めないであろう。これを結論的にいえば、ひとは、自分が上記の各種の相対的不自由およびその他のすべての相対的不自由の最下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的不自由の是正を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が上記の各種の相対的不自由およびその他のすべての相対的不自由の最上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的不自由の是正を求めないであろう。

したがって、「ひとは自我における相対的不自由の是正を求めているのだろうか。」という冒頭の命題の解明は次のようになるであろう。

ひとは、自分がすべての相対的不自由の中の一種類だけの相対的不自由であっても、その下位にいる場合には、自分より上位にいる、その一種類の相対的不自由を現象させているすべての人に対して相対的不自由の是正を求めるであろう。

上記のように、ここからは下位者の上位者に対する憎しみ・嫉妬・嫌悪など不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

しかし、ひとは、自分がすべての相対的不自由の中の一種類だけの相対的不自由であっても、その上位にいる場合には、自分より下位にいる、その一種類の相対的不自由を現象させているすべての人に対して相対的不自由の是正を求めないであろう。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・輕蔑などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

もう少し詳細に、しかし、結論的に要約すれば、次のようになるであろう。

(1) ひと(自我)は、一面においては、徹頭徹尾、相対的不自由の是正

を求めている。上記のように、ここからは下位者の上位者に対する憎しみ・嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

1) ひととは、ある相対的不自由の下位にいるときは、自分より上位にいるひとに対して相対的不自由の是正を求めている。

2) すべての相対的不自由の最上位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最上位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不自由の上位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不自由の是正を求めていることになるのである。

(2) ひと（自我）は、他面においては、徹頭徹尾、相対的不自由を求めている。上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの感情が生みだされる。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

1) ひととは、ある相対的不自由の上位にいるときは、自分より下位にいるひとに対して相対的不自由の是正を求めていない。別言すれば、ひととは、ある相対的不自由の上位にいるときは、自分より下位にいるひとに対して相対的不自由を求めているともいえる。

2) すべての相対的不自由の最下位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不自由の下位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不自由の是正を求めていないことになる。別言すれば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不自由の下位にいる単数の人もしくは複数の人々に対し

て、相対的不自由を求めているともいえるのである。

3・2・4 自我における相対的不自由の結果と絶対的愛の相関関係について

自我における相対的不自由の結果と絶対的愛の相関関係はどのようなものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。³²⁾

この相関関係を解明するのに先立って、自我における相対的不自由の結果は如何なるものであるのか、という命題について解明する。

上記第3章第2節第3項において解明した結論にしたがって、

- ① 相対的不自由の上位者は相対的不自由の是正を求めない。
- ② 相対的不自由の下位者は相対的不自由の是正を求める。

このように仮定するならば、

- ① 相対的不自由の上位者は相対的不自由の現実社会の是正を求めない。
- ② 相対的不自由の下位者は相対的不自由の現実社会の是正を求める。

ということになる。

ところで、既に触れたように、「すべての相対的不自由の最上位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最上位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不自由の上位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不自由の是正を求めていることになるのである。」ということになる。したがって、相対的不自由の最上位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不自由の上位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不自由の現実社会の是正を求めていることになるのである。

このように考えると、現実社会に対する人類の不平不満の数量は、膨大なものになるであろう。現存する数十億人の人間の相対的不自由の現実社会に対する不平不満を述べれば無数となるであろう。しかし、こうした相対的不自由を是正しようとする力と同程度の抑止力が作用することによって、相対的不自由をもたらず歴史的・社会的問題は容易には解決することができないであろう。

既に、第3章第2節第2項「相対的不自由の現実について」で述べた相対的不自由の種類との関係で述べるならば、次の問題を挙げることができる。

① 美女の相対的自由に対する醜女の相対的不自由の問題

美女と醜女がいる。美女は無数にランク付けられる。醜女もまた無数にランク付けられる。そして、美女度の上位に位置する人は、美女度の下位に位置する人に対して差別・蔑視することによって劣等感（相対的不自由）を与え、それによって自分の優越感（相対的自由）を高めようとする。それゆえ、醜女意識のある人は、少しでも美女度を上げ、自分の劣等感から逃れ、逆に自分の優越感を高めるために一生懸命に努力しているのである。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの不愛の類の感情が生み出される。また、下位者の上位者に対する憎しみ、嫉妬、羨望などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

② 記憶力の良い人（賢者）の相対的自由に対する記憶力の悪い人（愚者）の相対的不自由の問題

記憶力の良い人と悪い人がある。記憶力の良い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。記憶力の悪い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、記憶力の良い人は、記憶力の悪い人に対して差別・蔑視することによって劣等感（相対的不自由）を与え、それによって自分の優越感（相対的自由）を高めようとする。それゆえ、

記憶力の悪い人は、少しでも多く知識を記憶することによって、自分の劣等感から逃れ、逆に自分の優越感を高めるために一生懸命に努力しているのである。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・輕蔑などの不愛の類の感情が生み出される。また、下位者の上位者に対する憎しみ、嫉妬、羨望などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

③ 富裕者の相対的自由に対する貧困者の相対的不自由の問題

富裕者と貧困者がいる。富裕者の中でも、その程度において無数にランク付けられる。貧困者の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、富裕者は、貧困者に対して差別・蔑視することによって劣等感（相対的不自由）を与え、それによって自分の優越感（相対的自由）を高めようとする。それゆえ、貧困者は少しでも多く富裕になることによって、自分の劣等感から逃れ、逆に自分の優越感を高めるために一生懸命に努力しているのである。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・輕蔑などの不愛の類の感情が生み出される。また、下位者の上位者に対する憎しみ、嫉妬、羨望などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

上記の、相対的不自由がもたらす結果の他にも非常に多くの歴史的・社会的問題がある。

しかし、現存する数十億の人間の相対的不自由が存在する現実社会に対する無数の不平不満の膨大なエネルギーの爆発を抑制している力が他方にある。

既に触れたように、「すべての相対的不自由の最下位にいるひとは、そういうひとは現実には考えることができないが、数学的に、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従

えば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不自由の下位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不自由の是正を求めていることになるのである。」ということになる。すると、相対的不自由の最下位者一人以外のすべての現存する人類は、自分より相対的不自由の下位にいる単数の人もしくは複数の人々に対して、相対的不自由の現実社会の是正を求めていることになるのである。

上記のように、ここからは上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・軽蔑などの不愛の類の感情が生み出される。また、下位者の上位者に対する憎しみ、嫉妬、羨望などの不愛の類の感情が生み出される。この感情は人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

このように考えると、現実社会に対する人類の不平不満を抑止する数量は、膨大なものになるであろう。現存する数十億の人間の相対的不自由の現実社会に対する不平不満を抑止する意見を述べれば無数となるであろう。

3・2・5 自我における相対的自由の可能性と絶対的愛の相関関係について

自我における相対的自由の可能性と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。³³⁾

この相関関係を解明することに先立って、自我における相対的自由は可能であるのか、という命題について解明しなければならない。

既に詳細については第3章第2節第3項において述べたことであるが、まず第1に、相対的自由（相対的不自由の是正）を100%求めている人は、すべての相対的不自由において最下位にある1人（単数）である。反対に、相対的自由（相対的不自由の是正）を100%求めている人は、すべての相対的不自由において最上位にある1人（単数）である。第3に、相対的自由（相対的

不自由の是正)を求めているすべての人の上限を、先の第1に述べた、すべての相対的不自由において最下位にある1人(単数)として、その要求度を100%と仮定する。次に、相対的自由(相対的不自由の是正)を求めているすべての人の下限を、先の第2に述べた、すべての相対的不自由において最上位にある1人(単数)として、その要求度を0%と仮定する。すると、すべての人間が自分の所属する社会において相対的自由(相対的不自由の是正)を求める程度(要求度)は、上記の最上位の1人を除けば、1%以上100%以下となる。別言すれば、現存する全人類の相対的自由(相対的不自由の是正)を求める程度(要求度)は、上記の最上位の1人を除けば、この範囲内にある。

これも、既に第3章第2節第3項において触れたように、ひとは、自分が各種の相対的不自由の下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的自由(相対的不自由の是正)を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が各種の相対的不自由の上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的自由(相対的不自由の是正)を求めないであろう。

つまり、ひとは、すべての相対的不自由の最上位者になりたいのである。そして、ひとは、すべての相対的不自由の最下位者には絶対になりたくないのである。

これを別言するならば、ひとは、誰でも、支配—服従(被支配)の人間社会・集団における上下関係・権力関係の支配者的存在になりたいという欲求をもっているのであって、服従者(被支配者)・奴隸的存在には絶対になりたくないと思っているのではないだろうか。

したがって、「自我における相対的自由は可能であるか。」という本項の命題を解明すると、「自我における相対的自由は不可能である。」という結論になる。

この結論を、絶対的愛との関係で述べるならば、次のようになるであろう。

自我における相対的自由が不可能であるならば、ここからは、一方において、下位者の上位者に対する憎しみ・嫉妬・嫌悪などの不愛の類の感情が生み出される。また、他方において、上位者の下位者に対する哀れみ・蔑視・輕蔑など

の不愛の類の感情が生み出される。これらの感情は共に人間社会における絶対的愛の社会関係の誕生の障害となっている。

3・3 自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について

本節の目標は、自我の五段階欲求⁵⁾における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。この目標に向かって、まず第1項においては、「生理的欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第2項では、「安全欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第3項では、「社会的欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第4項では、「尊敬欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。そして、第5項では、「自己実現欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。

3・3・1 生理的欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について

本項の目標は、生理的欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

第1段階の生理的欲求³⁴⁾がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って生理的欲求における相対的不自由の状態と生理的欲求充足における相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から完全に開放されて絶対的自由の状態になることは不可

能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、絶対的不自由の状態にある。

ひとが第1段階の生理的欲求の不充足という絶対的に近い相対的不自由の状態にあるとき、何を愛することができるであろうか。例えば極度の空腹であるとき、何らかの食料を求め、それを愛する以外に何を愛することができるであろうか。

ひとは、自分より多くの良い食料を持っているすべての人々に対しては、憎しみ、嫉妬、羨望などの感情を持つであろう。また、自分より少ない粗末な食料しか持っていないすべての人々に対しては、哀れみ、蔑視、輕蔑などの感情を持つであろう。自分と全く同じ状態にある人はいないのである。

したがって、こうした状態の人間社会においては、常に不愛の類の社会関係が存在するだけであり、絶対的愛の社会関係は誕生することができないのである。

3・3・2 安全欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について

本項の目標は、安全欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を説明することである。

第2段階の安全欲求³⁵⁾がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って安全欲求における相対的不自由の状態と安全欲求充足における相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から完全に開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。

したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、絶対的不自由の状態にある。

ひとが第2段階の安全欲求の不充足という絶対的に近い相対的不自由の状態にあるとき、何を愛することができるであろうか。極度の生命危険状態にあるとき、何らかの安全状態を求め、それを愛する以外に何を愛することができるであろうか。

ひとは、自分より多くの良い安全を持っているすべての人々に対しては、憎しみ、嫉妬、羨望などの感情を持つであろう。また、自分より少ない粗末な安全しか持っていないすべての人々に対しては、哀れみ、蔑視、輕蔑などの感情を持つであろう。自分と全く同じ状態にある人はいないのである。

したがって、こうした状態の人間社会においては、常に不愛の類の社会関係が存在するだけであり、絶対的愛の社会関係は誕生することができないのである。

3・3・3 社会的欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について

本項の目標は、社会的欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

第3段階の社会的欲求³⁶⁾がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って社会的欲求における相対的不自由の状態と社会的欲求充足における相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から完全に開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、絶対的不自由の状態

にある。

ひとが第3段階の社会的欲求の不充足という絶対的に近い相対的不自由の状態にあるとき、何を愛することができるであろうか。極度の失業状態にあるとき、何らかの職業を求め、それを愛する以外に、何を愛することができるであろうか。

ひとは、自分より良い職業についているすべての人々に対しては、憎しみ、嫉妬、羨望などの感情を持つであろう。また、自分より下劣な職業にしかついていないすべての人々に対しては、哀れみ、蔑視、輕蔑などの感情を持つであろう。自分と全く同じ状態にある人はいないのである。

したがって、こうした状態の人間社会においては、常に不愛の類の社会関係が存在するだけであり、絶対的愛の社会関係は誕生することができないのである。

3・3・4 尊敬欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について

本項の目標は、尊敬欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

第4段階の尊敬欲求³⁷⁾がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って尊敬欲求における相対的不自由の状態と尊敬欲求充足における相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から完全に開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、絶対的不自由の状態にある。

ひとが第4段階の尊敬欲求の不充足という絶対的に近い相対的不自由の状態

にあるとき、何を愛することができるであろうか。極度に軽蔑されている状態または極度に尊敬されていない状態にあるとき、何らかの尊敬を求め、それを愛する以外に、何を愛することができるであろうか。

ひとは、自分より多くの良い尊敬を得ているすべての人々に対しては、憎しみ、嫉妬、羨望などの感情を持つであろう。また、自分より少ない尊敬しか得ていないすべての人々に対しては、哀れみ、蔑視、軽蔑などの感情を持つであろう。自分と全く同じ状態にある人はいないのである。

したがって、こうした状態の人間社会においては、常に不愛の類の社会関係が存在するだけであり、絶対的愛の社会関係は誕生することができないのである。

3・3・5 自己実現欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について

本項の目標は、自己実現欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか、という命題を解明することである。

第5段階の自己実現欲求³⁸⁾がある程度において充足されると、ひとはしばらくはその欲求を追い求めないけれども、しばらくすると、またその欲求は生じてくるのであり、このようにしてひとは生涯に亘って自己実現欲求における相対的不自由の状態と自己実現欲求充足における相対的自由の状態とを繰り返して生きてゆくのである。ひとは、誰でも、生まれてから死ぬまで、この欲求の支配下にある。この支配から完全に開放されて絶対的自由の状態になることは不可能である。したがって、一時的にその支配から解放されることはあっても、つまり一時的に相対的自由の状態におかれることはあっても、絶対的不自由の状態にある。

ひとが第5段階の自己実現欲求の不充足という絶対的に近い相対的不自由の状態にあるとき、何を愛することができるであろうか。極度の自己実現不可能

状態にあるとき、何らかの自己実現を求め、それを愛する以外に、何を愛することができるであろうか。

ひとは、自分より多く自己実現をしているすべての人々に対しては、憎しみ、嫉妬、羨望などの感情を持つであろう。また、自分より少ない自己実現しかしていないすべての人々に対しては、哀れみ、蔑視、軽蔑などの感情を持つであろう。自分と全く同じ状態にある人はいないのである。

したがって、こうした状態の人間社会においては、常に不愛の類の社会関係が存在するだけであり、絶対的愛の社会関係は誕生することができないのである。

4 絶対的愛の可能性について

本稿の目標は、社会化における絶対的愛への道を解明することである。この目標に向かって、この第4章においては、「絶対的愛の可能性について」を研究する。まず第1節では、「三視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第2節では、「三視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。そして第3節では、「三視点からみた絶対的愛の可能性について」を研究する。

4・1 三視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について

三視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本節の目標である。

この目標に向かって、まず第1項では、「絶対的平等の可能性」を研究する。第2項では、「人間的視点からみた絶対的平等と絶対的愛の関係について」を研究する。第3項では、「生物的視点からみた絶対的平等と絶対的愛の関係について」を研究する。そして第4項では、「物質的視点からみた絶対的平等と

絶対的愛の関係について」を研究する。

4・1・1 絶対的平等の可能性について

絶対的平等の可能性は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。³⁹⁾

前述の第3章第1節第2項における命題の解明によれば、現実社会においてはあらゆる所に相対的不平等がある。また、前述の第3章第1節第5項における命題の解明によれば、相対的平等の可能性は皆無である。さらに、前述の第3章第1節第1項における命題の解明によれば、自我においては絶対的不平等である。それゆえ、現在において生存するすべての人類の自我においても絶対的不平等である。

では、絶対的平等の可能性は如何なるものであるのか。別言すれば、いかなる視点からみたときに、現在において生存するすべての人類の絶対的平等は可能であるのか。

既に、第3章第1節第2項において述べたように、ひとは、社会の中で自分が置かれている地位によって、相対的平等（相対的不平等の是正）を求めるときもあれば、相対的平等（相対的不平等の是正）を求めないときもある。ひとは、自分が各種の不平等の下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が各種の不平等の上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めないであろう。

したがって、こうした視点からみるならば、ひとは常に相対的平等（相対的不平等の是正）を求めているわけではない。しかし、ひとは誰もがソクラテス、プラトン、アリストテレス、デカルト、カント、ショーペンハウアー、ニュートン、アインシュタイン等の学術的天才やレオナルド・ダ・ビンチ、ミケランジェロ、ラファエロ、ゴッホ、ピカソ等の芸術的天才やバッハ、モーツァルト、

カラヤン等の音楽的天才等の天才に、いくら成りたいという強い欲求があっても、容易に成れるわけではない。各種の人間の才能の頂点に立てるのは、極めて少数のひとつとにすぎない。現在において生存する全人類からその各種の天才の人数を引いた人数すなわちほぼ全人類が、自分の才能より遥かに上位にいる、夜空を照らす導きの星のように焔く天才に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めながらも、無理に決まっているとあきらめて、不平不満の永い生涯を生きていかなければならない。

また、女性は誰もがクレオパトラ・楊貴妃・小野小町のような美貌・容姿端麗に恵まれているわけではない。各種の美貌・容姿端麗の頂点に立てるのは、極めて少数のひとつとにすぎない。現在において生存する全人類の女性からその各種の天才的美貌・容姿端麗の頂点に立つ人数を引いた人数すなわちほぼ全人類の女性が、自分の美貌・容姿端麗の才能より遥かに上位にいる、大空の太陽や夜空を照らす月のように焔く美貌・容姿端麗の人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めながらも、絶対に無理であるとあきらめて、天与の容姿で永い一生を生きぬいていかなければならない。

さらに、ひとは誰もが巨万の富者に成れるわけではない。巨万の富者となって金持の頂点に立てるのは、極めて少数のひとつとにすぎない。現在において生存する全人類からその巨万の富者の人数を引いた人数すなわちほぼ全人類が、自分の所有財産より遥かに上位にいる、一国の王のように経済界に君臨する人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めながらも、無理であるとあきらめて、生涯を貧しく生きていかなければならない。

したがって、こうした視点からみるならば、ひとは常に相対的平等（相対的不平等の是正）を求めているといえる。しかし、すべての人類が相対的平等に到達することは不可能である。天才と美貌・容姿端麗は個人が努力して到達できるものではない。巨万の富者にもまた努力してなれるものではない。

では、ほとんどすべてのひとが求める相対的平等に到達する道はないのだろうか。

さて、仏教によれば、ほとんどの人々が自己の生命の次に大切にしている、上記の天才や美貌・容姿端麗や巨万の富者という特徴は、個人の本性ではなく、虚妄（夢幻空華）であるという。もし、それが虚妄であるならば、虚妄における相対的不平等は、その是正を求めて必死に努力する価値がないであろう。

では、個人の本性とは何であるのか。仏教の根本思想によれば、人間の本性は「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起（一切の事物は固定的な実体をもたず、さまざまな原因（因）や条件（縁）が寄り集まって成立しており、さらに、その要素が光速で集合し離散している姿）であるという。

さて、人間の本性が、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であるならば、すべての人間は、「不正の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において、相対的に平等である。また、この点から見ると、すべての人間は、個人と個人を比較する必要性が皆無であるので、相対的平等というよりもむしろ絶対的平等といったほうがよいであろう。

では、社会化における絶対的平等と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。既に触れたように、この命題を解明することが本節の目標である。

そこで、第2項においては、「人間的視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」研究する。第3項では、「生物的視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」研究する。そして第4項では、「物質的視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」研究する。

4・1・2 人間的視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について

人間的視点からみた個人の社会化における絶対的平等と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。⁴⁰⁾

まず、人間的視点からみた個人の社会化における絶対的平等は、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であることを知れば、すべての人間は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において絶対的に平等であることを知るからである。

さて、ひとは、すべての人間が、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において絶対的に平等であるならば、この点においては、絶対的不平等を根源として発生してくる絶対的不愛が誕生しないことを知るであろう。これによって、ひとは、すべての人間が、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において絶対的に平等であるならば、この点において、すべての人間に絶対的愛を授受する能力が存在すると仮定した場合には、すべての人間に対するすべての人間の絶対的愛の授受の社会関係が誕生する可能性が生じることを知るであろう。

4・1・3 生物的視点からみた絶対的平等と絶対的愛の関係について

生物的視点からみた個人の社会化における絶対的平等と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。⁴¹⁾

まず、生物的視点からみた個人の社会化における絶対的平等は、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての生物は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において絶対的に平等であることを知るからである。

さて、ひとは、すべての人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての生物は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において絶対的に平等であるから、この点においては、絶対的不平等を根源として発生してくる絶対的不愛が誕生しないことを知るであろう。これによって、ひとは、宇宙のすべての生物が、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において絶対的に平等であるならば、この点において、宇宙のす

すべての生物に絶対的愛を授受する能力が存在すると仮定した場合には、宇宙のすべての生物に対する宇宙のすべての生物の絶対的愛の授受の関係が誕生する可能性が生じることを知るのであろう。

4・1・4 物質的視点からみた絶対的平等と絶対的愛の関係について

物質的視点からみた個人の社会化における絶対的平等と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。⁴²⁾

まず、物質的視点からみた個人の社会化における絶対的平等は、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての物質の本性と同様であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての物質の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての物質は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対的に平等であることを知るからである。

さて、ひとは、すべての人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての物質の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての物質は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対的に平等であるから、この点においては、絶対的不平等を根源として発生してくる絶

対的不愛が誕生しないことを知るであろう。これによって、ひとは、宇宙のすべての物質が、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において絶対的に平等であるならば、この点において、宇宙のすべての物質に絶対的愛を授受する能力が存在すると仮定した場合には、宇宙のすべての物質に対する宇宙のすべての物質の絶対的愛の授受の関係が誕生する可能性が生じることを知るであろう。

4・2 三視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について

三視点からみた絶対的自由と絶対的愛はどのような関係にあるのか。この命題を解明することが本節の目標である。

この目標に向かって、まず第1項では、「絶対的自由の可能性について」を研究する。第2項では、「人間的視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第3項では、「生物学的視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。そして第4項では、「物質的視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。

4・2・1 絶対的自由の可能性について

絶対的自由の可能性は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。⁴³⁾

前述の第3章第2節第1項における命題の解明によれば、自我においては絶対的不自由である。それゆえ、いうまでもなく現在において生存するすべての人類の自我においても絶対的不自由である。

では、絶対的自由の可能性は如何なるものであるのか。別言すれば、いかなる視点からみた場合において、現在において生存するすべての人類の絶対的自

由は可能であるのか。

ところで、この絶対的自由の可能性は如何なるものであるのか、という命題を解明するためには、その前提条件となる「絶対的平等の可能性」について述べておく必要があるのであるが、「絶対的平等の可能性」については、既に、第4章第1節第1項において述べてあるので、ここでは重複を避けたい。

さて、既に、第4章第1節第1項において触れたように、人間の本性が、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教の見解）の縁起であるならば、ひとは、すべての人間は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教の見解）であるという点において絶対的に平等であるから、絶対的自由であると言えることができる。なぜならば、人間社会における相対的不平等状態からは相対的不自由が生みだされる可能性が常にあるからである。たとえば、人間社会における相対的不平等状態からは上・下（支配・被支配）の社会関係が生みだされる可能性があり、上（支配）の側に相対的自由の社会関係が生みだされ、反対に下（被支配）の側に相対的不自由の社会関係が生みだされる可能性があるからである。したがって、人間は絶対的平等でなければ、絶対的自由ではないのである。

では、社会化における絶対的自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。既に触れたように、この命題を解明することが本節の目標である。

そこで、第2項においては、「人間的視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。第3項では、「生物的視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。そして第4項では、「物質的視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。

4・2・2 人間的視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について

人間的視点からみた個人の社会化における絶対的自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。⁴⁴⁾

まず、人間的視点からみた個人の社会化における絶対的自由は、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であることを知れば、すべての人間は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対的に平等であり、また、それゆえに、すべての人間は、この点において、絶対的に自由であるということを知からである。

さて、ひとは、すべての人間が、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対的に自由であるならば、この点においては、絶対的不自由を根源として発生してくる絶対的不愛が誕生しないことを知るであろう。これによって、ひとは、すべての人間が、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対的に自由であるならば、この点において、すべての人間に絶対的愛を授受する能力が存在すると仮定した場合には、すべての人間に対するすべての人間の絶対的愛の授受の社会関係が誕生する可能性が生じることを知るであろう。

4・2・3 生物的視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について

生物的視点からみた個人の社会化における絶対的自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。⁴⁵⁾

まず、生物的視点からみた個人の社会化における絶対的自由は、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての生物は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対に平等であり、また、それゆえに、宇宙のすべての生物は、この点において、絶対に自由であるということを知るからである。

さて、ひとは、すべての人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての生物は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対に自由であるから、この点においては、絶対的不自由を根源として発生してくる絶対的不愛が誕生しないことを知るであろう。これによって、ひとは、宇宙のすべての生物が、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)で

あるという点において絶対的に自由であるならば、この点において、宇宙のすべての生物に絶対的愛を授受する能力が存在すると仮定した場合には、宇宙のすべての生物に対する宇宙のすべての生物の絶対的愛の授受の関係が誕生する可能性が生じることを知るであろう。

4・2・4 物質的視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について

物質的視点からみた個人の社会化における絶対的自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。⁴⁶⁾

まず、物質的視点からみた個人の社会化における絶対的自由は、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であり、それは宇宙のすべての物質の本性と同様であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であり、それは宇宙のすべての物質の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての物質は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において絶対に平等であり、また、それゆえに、宇宙のすべての物質は、この点において、絶対に自由であるということを知ることからである。

さて、ひとは、すべての人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であり、それは宇宙のすべての物質の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての物質は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的

見解) または「無的主体」(仏教的見解) であるという点において絶対的に自由であるから、この点においては、絶対的不自由を根源として発生してくる絶対的不愛が誕生しないことを知るであろう。これによって、ひとは、宇宙のすべての物質が、「不生の単種単一の素粒子」(物理的見解) のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解) または「無的主体」(仏教的見解) であるという点において絶対的に自由であるならば、この点において、宇宙のすべての物質に絶対的愛を授受する能力が存在すると仮定した場合には、宇宙のすべての物質に対する宇宙のすべての物質の絶対的愛の授受の関係が誕生する可能性が生じることを知るであろう。

4・3 三視点からみた絶対的愛の可能性について

三視点からみた絶対的愛の可能性は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本節の目標である。

この目標に向かって、まず第1項では、「絶対的愛の可能性について」を研究する。第2項では、「人間的視点からみた絶対的愛について」を研究する。第3項では、「生物的視点からみた絶対的愛について」を研究する。第4項では、「物質的視点からみた絶対的愛について」を研究する。

4・3・1 絶対的愛の可能性について

先の第3章第1節および第3章第2節における各命題の解明の結果によれば、自我においては絶対的愛は不可能である。それゆえ、いうまでもなく現在において生存するすべての人類の自我においても絶対的愛は不可能である。

では、絶対的愛の可能性は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。別言すれば、いかなる視点からみたときに、現在において生存するすべての人類の絶対的愛は可能であるのか。

ところで、この絶対的愛の可能性は如何なるものであるのか、という命題を解明するためには、その前提条件となる「絶対的平等の可能性」と「絶対的自由の可能性」について述べておく必要があるのであるが、「絶対的平等の可能性」については、既に、第4章第1節第1項において述べてあるので、ここでは重複を避けたい。また、同様に、「絶対的自由の可能性」については、既に、第4章第2節第1項において述べてあるので、ここでは重複を避けたい。

さて、既に、第4章第1節において触れたように、ひとは、すべての人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であり、それは宇宙のすべての物質の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての物質は、「不正の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において絶対的に平等であるから、この点においては、絶対的不平等を根源として発生してくる絶対的不自由が誕生しないことを知るであろう。これによって、ひとは、すべての人間は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）であるという点において絶対的に平等であるならば、この点において、絶対的自由であることを知るであろう。この点について、もう少し説明を加えるならば、次のように言うことができる。

前述のように、人間社会における相対的不平等状態からは相対的不自由の社会関係が生みだされる可能性が常にある。たとえば、人間社会における相対的不平等状態には上・下（支配・被支配）の社会関係を生みだす可能性があり、そこには上（支配）の側に相対的自由の社会関係を生みだし、反対に下（被支配）の側に相対的不自由の社会関係を生みだす可能性がある。したがって、人間は絶対的平等でなければ、絶対的自由ではないのである。

また、個人の社会化における絶対的愛についても、ひとは、すべての人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点

的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての物質の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての物質は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対的に平等であるから、この点においては、絶対的愛が可能であることを知るであろう。別言すれば、ひとは、すべての人間は、絶対的平等の存在であるならば、絶対的自由の社会関係が誕生することが可能となり、そこから絶対的愛の社会関係が誕生することが可能となることを知るであろう。なぜならば、ひとは、すべての人間は、絶対的平等の存在であるならば、そこには、いかなる拘束も存在することが不可能であるから、絶対的自由の社会関係が誕生することが可能となり、また、そこには、いかなる絶対的不愛も誕生することが不可能であるから、絶対的愛の社会関係が誕生することが可能になり、さらに、すべての人間は、絶対的平等の存在であり、しかも、そこに、絶対的自由の社会関係が成立しているならば、そこには、いかなる絶対的不愛も誕生することが不可能であるから、絶対的愛の社会関係が誕生することが可能となることを知るであろうからである。

では、社会化における絶対的愛の可能性は如何なるものであるのか。既に触れたように、この命題を解明することが本節の目標である。

そこで、第2項においては、「人間的視点からみた絶対的愛について」を研究する。第3項では、「生物的視点からみた絶対的愛について」を研究する。そして第4項では、「物質的視点からみた絶対的愛について」を研究する。

4・3・2 人間的視点からみた絶対的愛について

人間的視点からみた個人の社会化における絶対的愛は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

人間的視点からみた個人の社会化における絶対的愛は、人間の本性は、「不

生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であることを知れば、すべての人間は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対的平等の社会的存在であり、また、それゆえに、すべての人間には、この点において、絶対的自由の社会関係の誕生が可能となり、さらに、それゆえに、この点において、すべての人間に絶対的愛を授受する能力が存在すると仮定した場合には、すべての人間に対するすべての人間の絶対的愛の授受の社会関係が誕生する可能性が生じることを知るからである。

4・3・3 生物的視点からみた絶対的愛について

生物的視点からみた個人の社会化における絶対的愛は如何なるものであるのか。この命題を説明することが本項の目標である。

生物的視点からみた個人の社会化における絶対的愛は、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての生物の本性と同様であるということを知れば、宇宙のすべての生物は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何

学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対的平等の存在であり、また、それゆえに、宇宙のすべての生物は、この点において、絶対的自由の存在であり、さらに、絶対的平等の存在であるがゆえに、また、絶対的平等の存在に加えて絶対的自由の存在であるがゆえに、この点において、宇宙のすべての生物に絶対的愛を授受する能力が存在すると仮定した場合には、宇宙のすべての生物に対する宇宙のすべての生物の絶対的愛の授受の関係が誕生する可能性が生じることを知るからである。

4・3・4 物質的視点からみた絶対的愛について

物質的視点からみた個人の社会化における絶対的愛は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

物質的視点からみた個人の社会化における絶対的愛は、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての物質の本性と同様であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、ひとは、人間の本性は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)の縁起であり、それは宇宙のすべての物質の本性の姿と同様であるということを知れば、宇宙のすべての物質は、「不生の単種単一の素粒子」(物理学的見解)のような「分割不能の点的存在」(数学的・幾何学的見解)または「無的主体」(仏教的見解)であるという点において絶対的平等の存在であり、また、それゆえに、宇宙のすべての物質は、この点において、絶対的自由の存在であり、さらに、絶対的平等の存在であるがゆえに、また、絶対的平等の存在に加えて絶対的自由の存在であるがゆえに、この点において、宇宙のすべての物質に絶対的愛を授受する能力が存在すると仮定した場合には、宇宙のすべての物質に対する宇宙のすべての物質の絶対的愛の授受

の関係が誕生する可能性が生じることを知るからである。

5 絶対的愛の主要条件について

本稿の目標は、社会化における絶対的愛への道を解明することである。この目標に向かって、この第5章においては、「絶対的愛の主要条件について」を研究する。まず第1節では、「無我における絶対的平等と絶対的自由の相関関係について」を研究する。第2節では、「無我における絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」を研究する。そして第3節では、「無我における絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。

5・1 無我における絶対的平等と絶対的自由の相関関係について

無我における絶対的平等と絶対的自由の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本節の目標である。この目標に向かって、まず第1項では、「絶対的平等の先行性について」を研究する。第2項では、「絶対的自由の後行性について」を研究する。そして第3項では、「絶対的平等と絶対的自由の相関関係について」を研究する。

5・1・1 絶対的平等の先行性について

絶対的平等は絶対的自由に先行する要件であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。⁴⁷⁾

この命題を解明するために最も理解しやすい例として、最も小さい社会集団すなわちAとBの2人集団を想定することにしよう。AとBは絶対的平等でなければ絶対的自由でないといえるであろうか。これを確認するために、AとBは絶対的平等でないとしよう。そうすると、AとBの社会関係は、絶対的不平

等である社会においては、AとBとの間に上・下（支配・被支配）の関係が誕生する可能性がある。したがって、AとBが絶対的自由であるためには、その前提（前提条件）としてAとBは絶対的平等でなければならない。したがって、絶対的平等は絶対的自由に先行する要件である。

5・1・2 絶対的自由の後行性について

絶対的自由は絶対的平等に後行する要件であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。⁴⁸⁾

この命題を解明するために最も理解しやすい例として、上記第5章第1節第1項と同様に、最も小さい社会集団すなわちAとBの2人集団を想定することにしよう。上記第5章第1節第1項の結論によれば、AとBが絶対的自由であるためには、その前提（前提条件）としてAとBは絶対的平等でなければならないということが明確になった。では、AとBが絶対的平等であるためには、その前提（前提条件）としてAとBは絶対的自由でなければならないのか。別言すれば、AとBが絶対的自由であるならば、AとBは絶対的平等であるのか。AとBが絶対的自由であるということは、AとBとの間に上・下（支配・被支配）の関係が誕生する可能性がないことである。AとBとの間に上・下（支配・被支配）の関係が誕生する可能性がないことを前提（前提条件）として、AとBとの間に絶対的平等の社会関係が誕生するということは考えることができない。したがって、絶対的自由は絶対的平等に後行する要件である。

5・1・3 絶対的平等と絶対的自由の相関関係について

絶対的平等と絶対的自由の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。⁴⁹⁾

さて、上記第5章第1節第1項および第5章第1節第2項の両方の結論から、

絶対的平等と絶対的自由の相関関係については、絶対的平等が認識根拠であり、絶対的自由が帰結であることが明確である。

5・2 無我における絶対的平等と絶対的愛の相関関係

無我における絶対的平等と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本節の目標である。この目標に向かって、まず第1項では、「絶対的平等の先行性について」を研究する。第2項では、「絶対的愛の後行性について」を研究する。そして第3項では、「絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」を研究する。

5・2・1 絶対的平等の先行性について

絶対的平等は絶対的愛に先行する要件であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

この命題を解明するために最も理解しやすい例として、上記第5章第1節第1項と同様に、最も小さい社会集団すなわちAとBの2人集団を想定することにしよう。AとBは絶対的平等の存在でなければ絶対的愛の社会関係が誕生することができないといえるであろうか。これを確認するために、AとBは絶対的平等でないとしよう。そうすると、AとBの社会関係は、絶対的不平等である社会においては、AとBとの間に上位者に対する下位者の嫌悪などの不愛の類の感情が誕生したり、また下位者に対する上位者の蔑視などの不愛の類の感情が誕生したりする可能性がある。したがって、AとBとの間に絶対的愛の社会関係が誕生することができるためには、その前提（前提条件）としてAとBは絶対的平等の存在でなければならない。したがって、絶対的平等は絶対的愛に先行する要件である。

5・2・2 絶対的愛の後行性について

絶対的愛は絶対的平等に後行する要件であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

この命題を解明するために最も理解しやすい例として、上記第5章第2節第1項と同様に、最も小さい社会集団すなわちAとBの2人集団を想定することにしよう。上記第5章第2節第1項の結論によれば、AとBとの間に絶対的愛の社会関係が誕生することができるためには、その前提（前提条件）としてAとBは絶対的平等の存在でなければならないということが明確になった。では、AとBとが絶対的平等の存在であるためには、その前提（前提条件）としてAとBとの間に絶対的愛の社会関係が誕生していなければならないのか。別言すれば、AとBが絶対的愛の社会関係にあるならば、AとBは絶対的平等の存在であるのか。AとBが絶対的愛の社会関係であるということは、AとBとの間に上位者に対する下位者の嫌悪などの不愛の類の感情が誕生したり、また下位者に対する上位者の蔑視などの不愛の類の感情が誕生したりする可能性がないということである。AとBとの間に上位者に対する下位者の嫌悪などの不愛の類の感情が誕生したり、また下位者に対する上位者の蔑視などの不愛の類の感情が誕生したりする可能性がないことを前提（前提条件）として、AとBとの間に絶対的平等の社会関係が誕生するということは考えることができない。したがって、絶対的愛は絶対的平等に後行する要件である。

5・2・3 絶対的平等と絶対的愛の相関関係について

絶対的平等と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

さて、上記第5章第2節第1項および第5章第2節第2項の両方の結論から、絶対的平等と絶対的愛の相関関係については、絶対的平等が認識根拠であり、

絶対的愛が帰結であることが明確である。

5・3 無我における絶対的自由と絶対的愛の相関関係

無我における絶対的自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を解明することが本節の目標である。この目標に向かって、まず第1項では、「絶対的自由の先行性について」を研究する。第2項では、「絶対的愛の後行性について」を研究する。そして第3項では、「絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究する。

5・3・1 絶対的自由の先行性について

絶対的自由は絶対的愛に先行する要件であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

この命題を解明するために最も理解しやすい例として、上記第5章第1節第1項と同様に、最も小さい社会集団すなわちAとBの2人集団を想定することにしよう。AとBとの間に絶対的自由の社会関係が誕生していなければ絶対的愛の社会関係は誕生することができないといえるであろうか。これを確認するために、AとBとの間に絶対的自由の社会関係が誕生していないとしよう。そうすると、AとBの社会関係は、絶対的不自由である社会においては、AとBとの間に上位者に対する下位者の嫌悪などの不愛の類の感情が誕生したり、下位者に対する上位者の蔑視などの不愛の類の感情が誕生したりする可能性がある。したがって、AとBとの間に絶対的愛の社会関係が誕生するためには、その前提（前提条件）としてAとBは絶対的自由の社会関係でなければならない。したがって、絶対的自由は絶対的愛に先行する要件である。

5・3・2 絶対的愛の後行性について

絶対的自由は絶対的愛に後行する要件であるのか。この命題を説明することが本項の目標である。

この命題を説明するために、上記第5章第1節第1項と同様に、最も理解しやすい例として、最も小さい社会集団すなわちAとBの2人集団を想定することにしよう。上記第5章第3節第1項の結論によれば、AとBとの間に絶対的愛の社会関係が誕生するためには、その前提（前提条件）としてAとBとの間に絶対的自由の社会関係が誕生していなければならないということが明確になった。では、AとBとの間に絶対的自由の社会関係が誕生するためには、その前提（前提条件）としてAとBとの間に絶対的愛の社会関係が誕生していなければならないのか。別言すれば、AとBとの間に絶対的愛の社会関係が誕生しているならば、AとBとの間に絶対的自由の社会関係が誕生することができるのか。AとBとの間に絶対的愛の社会関係が誕生しているということは、AとBとの間に上位者に対する下位者の嫌悪などの不愛の類の感情が誕生したり、下位者に対する上位者の蔑視などの不愛の類の感情が誕生したりしていないということである。AとBとの間に上位者に対する下位者の嫌悪などの不愛の類の感情が誕生したり、下位者に対する上位者の蔑視などの不愛の類の感情が誕生していないことを前提（前提条件）として、AとBとの間に絶対的自由の社会関係が成立するということは考えることができない。したがって、絶対的愛は絶対的自由に後行する要件である。

5・3・3 絶対的自由と絶対的愛の相関関係について

絶対的自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を説明することが本項の目標である。

さて、上記第5章第3節第1項および第5章第3節第2項の両方の結論から、

絶対的自由と絶対的愛の相関関係については、絶対的自由が認識根拠であり、絶対的愛が帰結であることが明確である。

5・4 無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係

無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係は如何なるものであるのか。この命題を説明することが本節の目標である。

さて、絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の三者の関係はどのようなであろうか。すなわちどの概念が基本的であり、どれが派生的であるか、その論理的基礎づけの関係はどのようなであろうか、という問題である。この問題を解決するには、この三者を二つずつ組み合わせて、すなわち絶対的平等と絶対的自由、絶対的平等と絶対的愛、絶対的自由と絶対的愛、の三つに分けて考察すればよいであろう。

まず第1に、絶対的平等と絶対的自由との関係をみると、既に、第5章第1節「絶対的平等と絶対的自由の相関関係について」においてみたように、つねに絶対的平等が理由であり、絶対的自由は帰結である。

第2に、絶対的平等と絶対的愛との関係をみると、既に、第5章第2節「絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」においてみたように、つねに絶対的平等が理由であり、絶対的愛は帰結である。

第3に、絶対的自由と絶対的愛との関係をみると、既に、第5章第3節「絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」においてみたように、つねに絶対的自由が理由であり、絶対的愛は帰結である。

したがって、これを要約すれば、絶対的平等はつねに理由であり、絶対的愛はつねに帰結である。絶対的自由は絶対的平等に対しては帰結であるが、絶対的愛に対しては理由である。すなわち絶対的平等という概念から絶対的自由が必然的に導き出され、さらに絶対的自由という概念からまた絶対的愛が必然的

に導き出される。「絶対的平等 → 絶対的自由 → 絶対的愛」という論理的基礎づけの順序は定まっていて、これを逆にすることはできない。

6 結 論

本稿の目標は、社会化における絶対的愛への道を解明することであった。この目標に向かって、第2章においては、「絶対的愛の定義について」を研究した。第2章第1節においては、「歴史上の愛の主要な定義について」を研究した。ここでは、歴史上の愛の主要な定義の概略について明確にした。第2章第2節においては、「相対的愛について」を研究した。ここでは、相対的愛とは如何なるものであるのか、ということについて明確にした。第2章第3節においては、「相対的不愛について」を研究した。ここでは、相対的不愛とは如何なるものであるのか、ということについて明確にした。そして第2章第4節においては、「絶対的愛について」を研究した。ここでは、絶対的愛とは如何なるものであるのか、ということについて明確にした。

第3章においては、「絶対的愛の根源的障害について」を研究した。第3章第1節においては、「自我における絶対的不平等と絶対的愛の相関関係について」を研究した。ここでは、自我における絶対的不平等の社会状態においては絶対的愛が誕生することは不可能であることについて明確にした。第3章第2節においては、「自我における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。ここでは、自我における絶対的不自由の社会状態においては絶対的愛が誕生することは不可能であることについて明確にした。第3章第3節においては、「自我の五段階欲求における絶対的不自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。ここでは、自我の五段階欲求における絶対的不自由の状態においては絶対的愛が誕生することは不可能であることについて明確にした。

第4章においては、「絶対的愛の可能性について」を研究した。第4章第1

節においては「三視点からみた絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」を研究した。ここでは、すべての人間・生物・物質が、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）である点において絶対的に平等であるならば、この点において、すべての人間はすべての人間・生物・物質に対して絶対的愛を認識することができる存在である、ということを明確にした。第4章第2節においては「三視点からみた絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。ここでは、すべての人間・生物・物質は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）である点において絶対的に自由であるならば、この点において、すべての人間はすべての人間・生物・物質に対して絶対的愛を認識することができる存在である、ということを明確にした。第3章第3節においては「三視点からみた絶対的愛の可能性について」を研究した。ここでは、人間・生物・物質の本性は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であることを知れば、すべての人間・生物・物質は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）である点において絶対的平等であり、また、それゆえに、すべての人間・生物・物質は、同上の点において絶対的自由であり、さらに、それゆえに、すべての人間・生物・物質は、同上の点において絶対的愛が可能であるということを明確にした。

第5章においては、「絶対的愛の主要条件について」を研究した。第5章第1節においては、「無我における絶対的平等と絶対的自由の相関関係について」を研究した。ここでは、絶対的平等の先行性と絶対的自由の後行性について明確にした。第5章第2節においては、「無我における絶対的平等と絶対的愛の相関関係について」を研究した。ここでは、絶対的平等の先行性と絶対的愛の

後行性について明確にした。第5章第3節においては、「無我における絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。ここでは、絶対的自由の先行性と絶対的愛の後行性について明確にした。第5章第4節においては、「無我における絶対的平等と絶対的自由と絶対的愛の相関関係について」を研究した。ここでは、絶対的平等が絶対的自由と絶対的愛に先行し、絶対的自由が絶対的愛に先行することについて明確にした。

最後に、本稿の主題である「社会化における絶対的愛への道」について解明した結論の最小限の要旨を述べると次のようになる。

社会化における絶対的愛への道は、すべての人間・生物・物質の本来の姿は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）のような「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）または「無的主体」（仏教的見解）の縁起であり、一切の事物は固定的な実体をもたず、さまざまな原因（因）や条件（縁）が寄り集まって成立しており、さらに、その要素が光速で集合し離散している姿である、という宇宙の真実相を純粹直観したときに終点となる。そして、その時、ここから先の道は、終点のない「社会化における絶対的愛の道」となるのである。

[注]

- 1) 社会化とは、種々様々な方法で実現される形式である。これについて、ドイツの社会学者G. ジンメルは『社会学の根本問題』の「第3章 社交（純粹社会学即ち形式社会学の一例）」の冒頭において、次のように述べている。

「あの決定的な観念は、二つの概念によって生み出されたものである。即ち、第一に、すべて人間の社会は、内容と形式とに区別することが出来るということ、第二に、社会そのものは、極く一般的に見れば、諸個人間の相互作用を意味するということ。この相互作用は、必ず或る衝動から生れ、或いは、或る目的のために生れる。エロティックな本能、物質的利益、

宗教的衝動、それから、防禦や攻撃という目的、遊戯や利得という目的、援助や啓蒙という目的、その他の数知れぬ目的、そういうものが働くことによって、人間は、他の人々との共同生活、相互援助の行為、相互協力の行為、相互対抗の行為、相関関係の状態に入る。即ち、他の人々に作用を及ぼし、他の人々から作用を受けるようになる。この相互作用というのは、あの刺戟としての衝動や目的を持つ諸個人が一つの統一体になること、正に一つの「社会」になることを意味する。そこで、すべての歴史的現実の直接の具体的な要素である諸個人のうちに、衝動、関心、目的、傾向、心理の状態や運動として存在し、それとの関係において他の人々への作用や他の人々の作用の受容が生ずるもの — 私は、それを社会化の内容と呼ぶ。社会化の実質と呼んでもよい。このような素材が生命を満たし、このような動機が生命を駆り立てるが、素材や生命は、それ自体としては、社会的なものではない。飢餓や愛情も、労働や信仰も、技術や知性の機能及び結果も、その直接の意味から見れば、未だ社会化を意味するものではない。むしろ、これらのものが諸個人の孤立的並存を相互協力や相互援助の或る形式 — 相互作用という一般概念に含まれる — に変じる時、その時に初めて社会化になる。それゆえ、社会化というのは、種々様々な方法で実現される形式であって、この形式の中で、諸個人が前述の — 感覚的或いは理想的な、瞬間的或いは永続的な、意識的或いは無意識的な、原因に動かされ或いは目的を追う — 様々な関心のゆえに融合して、一つの統一体になるのであり、これらの関心は、この形式の内部で実現されるのである。」(ジンメル1979: 67—8)

また、ジンメルは『社会学』の「上巻」の「第1章 社会学の問題」の中の「社会的な生活の形式と内容」(ジンメル1994: 15—20)においても上記と同様のことを述べている。

- 2) 相対的愛と相対的不愛および絶対的愛について、近代ドイツの有名な哲学者ニーチェは、彼の有名な著書『ツァラトウストラ』の中の「隣人愛」

において、次のように説いている。

「わたしは君たちに隣人愛を勧めるだろうか。いや、むしろわたしは君たちに、隣人を避けよ、遠人を愛せよと勧める。

隣人愛より高いものは、最も遠い者、未来に出現する者への愛である。人間への愛よりなおいっそう高いものは、事業と目に見えぬ幻影とへの愛である。

君に先だって進んでゆくこの幻影、それは、わたしの兄弟よ、君よりも美しいのだ。なぜ君はそれに君の血肉を授けないのか。だが君は恐れて君の隣人へと走るのだ。

君たちはおのれ自身に堪えることができない、またおのれ自身を十分に愛していない。・・・（中略）・・・。

未来と、最も遠いこととが、君の「今日」の原因であれ。君の内部に、君は君の原因としての超人を愛さねばならぬ。

わたしの兄弟たちよ、わたしは君たちに隣人愛を勧めない。わたしは君たちに遠人愛を勧める。

ツァラトウストラはこう語った。」（ニーチェ1966：123—125）

さて、ツァラトウストラの語る「隣人愛」は、本稿における相対的愛である。これに対して「遠人不愛」（隣人以外の遠人に対する不愛）は、本稿における相対的不愛である。また、ツァラトウストラの語る「遠人愛」は、ツァラトウストラの言葉を借りて、少し具体的に言えば、「最も遠い者、未来に出現する者への愛」であり、また、「事業と目に見えぬ幻影とへの愛」であり、さらに、「君の内部にあって、君の原因となっている超人への愛」である。この「遠人愛」（「超人愛」）が、宇宙の真実相に対する愛を意味するものであるならば、それは、本稿における絶対的愛である。別言すれば、この「遠人愛」（「超人愛」）が、すべての人間・生物・物質の本来の姿は、「不生の単種単一の素粒子」（物理学的見解）「分割不能の点的存在」（数学的・幾何学的見解）「無的主体」

(仏教的見解)の縁起であり、一切の事物は固定的な実体をもたず、さまざまな原因(因)や条件(縁)が寄り集まって成立しており、さらに、その要素が光速で集合して離散している姿である、という宇宙の真実相を純粹直観したときに、それに対して誕生する愛を意味するものであるならば、それは、本稿における絶対的の愛である。

- 3) 絶対的の不等についての詳細は、拙論「社会化における絶対的の平等への道」(高澤2010)を参照してほしい。
- 4) 絶対的の不自由についての詳細は、拙論「社会化における絶対的の自由への道」(高澤2011)を参照してほしい。
- 5) 自我の五段階欲求については、マズロー著、小口忠彦訳 1987: 56—72を参照してほしい。
- 6) 絶対的の平等についての詳細は、拙論「社会化における絶対的の平等への道」(高澤2010)を参照してほしい。
- 7) 絶対的の自由についての詳細は、拙論「社会化における絶対的の自由への道」(高澤2011)を参照してほしい。
- 8) 「素粒子」「真空のエネルギー」および「ニュートリノ」等についての詳細は、佐藤 1979: 179—215、編集部・赤谷、協力: 駒宮他7名 2005: 28—55、リービット著、齊田訳 1976: 5—19およびアイザック・アシモフ著、齊田訳 1977: 262—264を参照してほしい。

また、近年において発見された「ダークマター」「ダークエネルギー」「ニュートラリーノ」等についての詳細は、谷口2005: 174—236、谷口2006: 163—70、佐藤2010: 105—24を参照してほしい。

しかし、ここで「素粒子の種類と大きさと生成・消滅する時間の長さ」について、上記の文献の内容を引用しながら、簡単に触れておきたいと思う。

<1> 素粒子の種類

「われわれは原子の世界から原子核の世界に進めば、電子、陽子、中性

子、光子のほかに π 中間子、ミューオン、ニュートリノなど数多くの素粒子を新しく素粒子の仲間追加せねばならない。」(佐藤1979: 201)

したがって、この説によれば、素粒子には電子、陽子、中性子、光子のほかに π 中間子、ミューオン、ニュートリノなど数多くの素粒子が含まれることになる。

<2> 素粒子の大きさ

① 電子の大きさ

電子 (electron) とは「素粒子の一。原子・分子の構成要素の一。十九世紀末、真空放電中に初めてその実在が確かめられた。静止質量は 9.1094×10^{-31} キログラム。電荷は -1.602×10^{-19} クーロンで、その絶対値を電気素量という。」(新村 2008)

したがって、この説によれば、電子の大きさは「質量は 9.1094×10^{-31} キログラム」であるということになる。

② 陽子の大きさ

陽子 (proton) とは「水素の原子核。電子の1836倍の質量と、電気素量に相当する陽電荷を持つ。スピンは $\frac{1}{2}$ 。素粒子の一つで、中性子と共に原子核の構成要素。 10^{32} 年以上の寿命を持つとされ、陽子の安定性は物質の安定性の基礎である。」(新村 2008)

したがって、この説によれば、陽子の大きさは電子の1836倍の質量であり、電子の大きさは「質量は 9.1094×10^{-31} キログラム」である。それゆえ、陽子の大きさは「質量は 9.1094×10^{-31} キログラム $\times 1836$ 」であるということになる。

③ 中性子の大きさ

中性子 (neutron) とは「素粒子の一。陽子よりわずかに大きい質量を有し、電荷をもたず、物質中の透過性が強い。陽子とともに原子核を構成する。1932年、チャドウィック (Chadwick) がアルファ (α) 粒子をベリリウムにぶつけたとき発見。」(新村 2008)

したがって、この説によれば、中性子の大きさは「質量は 9.1094×10^{-31} キログラム $\times 1836$ 」よりわずかに大きいということになる。

④ ニュートリノの大きさ

ニュートリノ (neutrino) とは「レプトンの一つベータ崩壊の際にエネルギー保存則に基いて存在を仮定され、その後存在を確認された中性の素粒子。スピンは $\frac{1}{2}$ 、質量はほとんど 0 だが未確定。中性微子。」(新村 2008)

したがって、この説によれば、ニュートリノ (中性微子) の大きさは、大体で言えば、電子の大きさと同じくらいで、「質量は 9.1094×10^{-31} キログラム」であるということになる。

⑤ 素粒子の大きさ

上記の諸説によれば、素粒子には電子、陽子、中性子、光子のほか π 中間子、ミューオン、ニュートリノなど数多くの素粒子が含まれるが、それらの大きさは、大体で言えば、電子の大きさと同じくらいで、「質量は 9.1094×10^{-31} キログラム」であるということになる。

< 3 > 素粒子が生成・消滅する時間の長さ

「場」は空間のあらゆる場所で、常に振動している。「場」が大きく振動した瞬間は、まさにエネルギーを外部からあたえられたのと似たような状況である。この瞬間、真空から粒子と反粒子がペアになって生まれる (対生成)。

ただしこのようなペアの存在が許されるのは、ほんのわずかな時間ではない。電子と陽電子の場合なら 10 の 2 乗分の 1 秒ほど、つまり 1 秒の 1 兆分の 1 のさらに 100 億分の 1 ほどの時間だ。」(赤谷 2005)

したがって、この説によれば、1 素粒子が生成・消滅する時間の長さ

は「1秒÷10の22乗」であるということになる。

<4> ダークマター、ダークエネルギーおよびニュートラリーノ

① ダークマターとダークエネルギー

ダークマターとダークエネルギーの存在については、「いま宇宙論の世界で大きな謎になっているのが、私たちの住む宇宙には2種類の「不思議なもの」があるということです。そのひとつが、ダークマター（dark matter）であり、もうひとつがダークエネルギー（dark energy）といわれるものです。」（佐藤 2010：105—6）「私たちの宇宙を平均的に見たときに、私たちの体や、星などを構成している通常の物質は全体の4%ほどでしかありません。そのほかは、ダークマターと呼ばれる、銀河や銀河団を満たしているよくわからない物質が23%、そして残りの73%が、宇宙全体を満たしているダークエネルギーと呼ばれる正体不明のものであると考えられています。」（佐藤 2010：107）ということであり、これらの物質は最近年において発見されたものである。

② ダークマター（dark matter）とニュートラリーノ（neutralino）

ダークマターとは何であるのか。

「これまででいちばん有力な候補と見られていたのは、重さのある素粒子のニュートリノです。岐阜県の神岡鉱山跡にあるスーパーカミオカンデの観測結果によって、1998年にニュートリノに重さがあることが証明されました。しかし残念ながら、その質量はダークマターであるために必要な質量の数十分の1程度でしかなく、ニュートリノだけではダークマターは説明できないことがわかりました。」（佐藤 2010：112）

「さて、ニュートリノに代わるダークマターの候補ですが、現在では、ニュートラリーノなどの素粒子が有力な候補として考えられています。CERN（欧州原子核研究機構）がスイスのジュネーブ郊

外に造ったLHC (Large Hadron Collider=大型ハドロン加速器) が2009年11月から本格的に稼動を開始しましたが、その実験によって確認されることになるかもしれません。」(佐藤 2010 : 113) ということである。

③ ダークエネルギー (dark energy)

ダークエネルギーとは何であるのか。

「これは宇宙全体を一様に満たしている正体不明のエネルギーで、発見されたのは1998年のことでした。」(佐藤 2010 : 115)

「当時の報道はこの発見を、真空のエネルギーが宇宙を満たしていることがわかった、と伝えました。真空のエネルギーとは先に説明した通り、宇宙を押し広げている力で、数学的にはアインシュタインの宇宙定数と同じ意味を持っています。」(佐藤 2010 : 116)

「ただし、「真空のエネルギー」という言葉は数年前から使わなくなり、現在は「ダークエネルギー」のほうが使われるようになっていきます。これは、ダークマターと対になって出てきた言葉で、エネルギー的に「ダーク」(不明) だということです。」(佐藤 2010 : 117—8) ということである。

- 9) 「分割不能の存在」について少し説明しておきたい。素粒子とは、分割不能の物質であるという。しかし、分割不能の物質というのは、一般に物質は無限に二分割が可能であるという原則に従うならば、存在することができない。この原則と矛盾するからである。分割可能でしかも分割不可能な物質というものは人間の論理能力の限界を超えているものであるから、それを理解することはできないし、それを想定することもできない。また、分割不能の物質というのは、空間と時間を持たない物質であるという原則に従うならば、それを人間の能力で想定することは不可能である。確かに、空間と時間を持たない物質が存在するのであるならば、その物質は分割不能である。しかし、それは人間の論理能力にとっては、「無」であるから、

物質では有り得ない。したがって、分割不能の物質というものは、可想体にすぎないといえよう。

- 10) 「無的主体」について少し説明しておきたい。この「無的主体」と同様のことをあらわす仏教用語として、「空」「縁起」「無自性」「無常」「仏性」などがある。

- ① 「宇宙（万物）は空である」における「空」については、非常に多くの学説がある。中村 1994bには、次のように述べられている。

「＜空＞は大乗仏教の根本観念であるということは、だれでも知っている。では＜空＞とは何か、ということになると、なかなか答えが簡単には出て来ない。

＜空＞を説いた文献に関する研究は、毎年無数に多く刊行されている。しかし「＜空＞とは何か？」という端的な問題にたいしては、かならずしも答えが与えられていない。学者はとにかく避けて通っているという傾きがある。

ここでは、空の理論を説いた代表的な哲学者であるナーガールジュナ（竜樹）の主著『中論』を主な手がかりとして、空の論理を解明しようと努めることにする。」（中村 1994b：はしがき i）

したがって、「空」の理論に関心のある人は、この『空の論理』およびその他の文献を参照してほしい。

- ② 「縁起」あるいは「十二縁起説」についての詳細は、中村 1994a：440—528を参照してほしい。また、Olson, Carl, 2005：38—45も参照してほしい。
- ③ 釈迦の「空」については、『般若心経』を参照してほしい。『般若心経』の解釈本はたくさんあるので、ここでは山田訳 1986および高神 1952を挙げておきたい。
- ④ 六祖慧能の「本来無一物」も「無的主体（存在）」と同様の仏教用語である。これについては、久須本 2000：155—7を参照してほしい。

- ⑤ 臨済の「無位の真人」もまた「無的主体（存在）」と同様の仏教用語である。これについては、臨済著，入矢訳 **1989：20—1**を参照してほしい。
- ⑥ 盤珪の「不生」も「無的主体（存在）」と同様の仏教用語である。これについては、玉城 **1994：68—71**を参照してほしい。
- 11) 「社会化の原動力—体系の大要—」についての詳細は、高澤 **1997**を参照してほしい。
- 12) 「社会化の発展」についての詳細は、高澤 **1998**を参照してほしい。
- 13) 「社会化の最終目標」についての詳細は、高澤 **2006**を参照してほしい。
- 14) 「社会化の最終目標への道」についての詳細は、高澤 **2009**を参照してほしい。
- 15) 高澤**2009：65—6**から部分修正をして引用した。
- 16) 「社会化における絶対的平等への道」についての詳細は、高澤 **2010**を参照してほしい。
- 17) 「社会化における絶対的自由への道」についての詳細は、高澤 **2011**を参照してほしい。
- 18) 「社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間」についての詳細は、高澤 **2012**を参照してほしい。
- 19) 本稿で使用するプラトンの愛の定義についての偉大さを証明するために、ショウペンハウアーが言った「神のようなプラトン」について少し説明しておきたい。ショウペンハウアーは、「根拠律の四つの根について」という論文の「第1章序論」の「第1節方法」の冒頭において「神のようなプラトンも驚嘆すべきカントも、あらゆる哲学的思索、いやすべての知識一般の方法として一つの規則を勧めている点では、力強く声を合わせている。それは、同質性の原理と特殊性の原理という二つの原理が、片方をのけものにしてみよう一方だけというのではなく、同じく満足させられなければならない、ということである。」（ショウペンハウアー

1972 : 13) と述べている。

- 20) 仏教の愛と慈悲の相違点について、中村元氏は「愛」の理想と現実」という論文において、次のように述べている。

「愛は慈悲に通ずるものであるが、愛はそのまま慈悲になるのではない。愛は慈悲と異なる性格をもっている。

まず第一に愛の典型的なものと見られる恋愛、性愛は欲をともなっている。・・・(中略)・・・。また恋愛は人間の生理的消長と付加分離であり、或る年齢に達するまではそのことがなく、また或る年齢から以後はやはり恋愛から遠ざかる。だから人間の全生涯を通じて見られる現象ではない。

第二に恋愛は相手に対する独占欲を強くもっている。だからもしも愛している相手に裏切られた場合には、愛は憎しみに転ずることがある。・・・(中略)・・・。それは、愛が本質的に、自己を愛することを中心としているからである。しかるに慈悲は、愛憎の対立を超えた絶対の愛である。ひとを憎むということがない。

第三に、愛ははたらく範囲の限定されたものである。疎い者よりも親しい者を愛する。自分の次には家族を愛し、その次には友人や同じ組織の人間を愛し、同郷人を愛し、さらにひろげると同国人を愛し、世界の人々を愛するというのは最後の理想であろう。慈悲の理想はさらにひろく一切の生きとし生けるものを愛するということまで至る。これは有限な存在である人間にとってはなかなかできないことである。平等なる愛ということは観念的な理想としては成立するが、現実の愛はつねに制約されたものである。」(仏教思想研究会1975 : 26,27)

このように、中村元氏は、上記の第二の愛の特徴において、「慈悲は、愛憎の対立を超えた絶対の愛である。」と述べている。

この場合の「慈悲」＝「絶対の愛」とは、人間を対象とする人間（自我＝社会的自我）の愛である。

しかし、上記の第三の愛の特徴においては、「慈悲の理想はさらにひろく一切の生きとし生けるものを愛するということまで至る。」と述べている。

この場合の「慈悲の理想」＝「絶対の愛（の理想）」とは、人間を含む一切の生物を対象とする人間（自我＝生物的自己）の愛である。

また、上記の第三の愛の特徴においては、上記に続いて「これは有限な存在である人間にとってはなかなかできないことである。平等なる愛ということは観念的な理想としては成立するが、現実の愛は常に制約されたものである。」と述べている。

この場合の「慈悲の理想」＝「絶対の愛（の理想）」＝「平等なる愛」＝「観念的な理想」とは、上記と同様に、人間を含む一切の生物を対象とする人間（自我＝生物的自己）の愛である。

上記の、第二の愛の特徴における「人間を対象とする慈悲」は、本稿第2章第1節第4項「仏教の慈悲について」において述べた「三縁慈悲」の「衆生縁（衆生を対象とする）の慈悲」に相当するものである。また、第三の愛の特徴における「人間を含む一切の生物を対象とする慈悲」も、本稿第2章第1節第4項「仏教の慈悲について」において述べた「三縁慈悲」の「衆生縁（衆生を対象とする）の慈悲」に相当するものである。

したがって、上記の「人間を対象とする慈悲」および「人間を含む一切の生物を対象とする慈悲」は、本稿における相対的愛に属する愛であり、絶対的愛に属する愛ではないのである。

- 21) 上記〔注〕20)を参照してほしい。
- 22) 上記〔注〕2)を参照してほしい。
- 23) 上記〔注〕2)を参照してほしい。
- 24) 自我における絶対的不平等の証明についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等への道」（高澤2010）を参照してほしい。
- 25) 自我における相対的不平等の現実についての詳細は、拙論「社会化に

における絶対的平等への道」(高澤2010)を参照してほしい。

- 26) 自我における相対的不平等の是正についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等への道」(高澤2010)を参照してほしい。
- 27) 自我における相対的不平等の結果についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等への道」(高澤2010)を参照してほしい。
- 28) 自我における相対的平等の可能性についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等への道」(高澤2010)を参照してほしい。
- 29) 自我における絶対的不自由の証明についての詳細は、拙論「社会化における絶対的自由への道」(高澤2011)を参照してほしい。
- 30) 自我における相対的不自由の現実についての詳細は、拙論「社会化における絶対的自由への道」(高澤2011)を参照してほしい。

また、「自由」と「不自由」について、J. J. ルソーは『社会契約論』の「第1章 第1編の主題」の冒頭において「人間は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている。ある者は他人の主人であると信じているが、事実は彼ら以上に奴隷である。」と述べている。(ルソー1966: 232)

さて、ルソーは、「人間は生まれながらにして自由である」と考えていた。この「自由」を無我次元における「絶対的自由」と考えていたのだろうか。それとも、自我次元における「相対的自由」と考えていたのだろうか。前者であるならば、正しい。しかし、後者であるならば、「人間は生まれながらにして絶対的に不自由である」というべきであろう。あるいは、「人間は生まれながらにして自由である」という命題を、「人間は人間社会に誕生し、社会化し、社会的存在として社会的拘束の社会組織の一員となるまでは自由である」と考えていたのだろうか。そうであるならば、自我の生物的次元においては「人間は生まれながらにして自由である」と主張することはできないが、自我の社会的(社会化)次元においては「人間は生まれながらにして自由である」と主張することは、誤謬ではない。

ところで、「相対的不自由」についての分析研究を進めるならば、極めて複雑な内容となるであろう。しかし、本稿の最終目標はそこにあるのではなく、人間における絶対的自由の可能性について知ることにある。しかし、その人間における絶対的自由の可能性について知りたいという欲求の原動力となっているのは、いうまでもなく人間社会における絶対的・相対的不自由の現実である。なお、しかしながら、人間における絶対的自由の可能性について知りたいという欲求の原動力である人間社会における絶対的・相対的不自由の現実とその歴史的事実の分析・解明のために多くの時間を費やしたくはないのである。それで、現実社会における「人間的不自由」の分析・解明については、粗雑のままでお許し願ひ、また、「人間的不自由」の起原および歴史については、上記のルソーの名著を研究していただくことにして、筆者は本稿の目標に向かって進みたいと思う。

- 31) 自我における相対的不自由の是正についての詳細は、拙論「社会化における絶対的自由への道」（高澤2011）を参照してほしい。
- 32) 自我における相対的不自由の結果についての詳細は、拙論「社会化における絶対的自由への道」（高澤2011）を参照してほしい。
- 33) 自我における相対的自由の可能性についての詳細は、拙論「社会化における絶対的自由への道」（高澤2011）を参照してほしい。
- 34) マズローの主張した第1段階の生理的欲求についての詳細は、主に、マズロー著、小口訳 1987 : 56—7を参照してほしい。
- 35) マズローの主張した第2段階の安全欲求についての詳細は、主に、マズロー著、小口訳 1987 : 61, 65—7を参照してほしい。
- 36) マズローの主張した第3段階の社会的欲求についての詳細は、主に、マズロー著、小口訳 1987 : 68を参照してほしい。
- 37) マズローの主張した第4段階の尊敬欲求についての詳細は、主に、マズロー著、小口訳 1987 : 70—1を参照してほしい。
- 38) マズローの主張した第5段階の自己実現欲求についての詳細は、主に、

マズロー著、小口訳 1987: 72を参照してほしい。

- 39) 絶対的平等の可能性についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等への道」(高澤2010)を参照してほしい。
- 40) 人間的視点からみた絶対的平等についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等への道」(高澤2010)を参照してほしい。
- 41) 生物的視点からみた絶対的平等についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等への道」(高澤2010)を参照してほしい。
- 42) 物質的視点からみた絶対的平等についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等への道」(高澤2010)を参照してほしい。
- 43) 絶対的自由の可能性についての詳細は、拙論「社会化における絶対的自由への道」(高澤2011)を参照してほしい。
- 44) 人間的視点からみた絶対的自由についての詳細は、拙論「社会化における絶対的自由への道」(高澤2011)を参照してほしい。
- 45) 生物的視点からみた絶対的自由についての詳細は、拙論「社会化における絶対的自由への道」(高澤2011)を参照してほしい。
- 46) 物質的視点からみた絶対的自由についての詳細は、拙論「社会化における絶対的自由への道」(高澤2011)を参照してほしい。
- 47) 「絶対的平等と絶対的自由の相関関係」における絶対的平等の先行性についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間」(高澤2012)を参照してほしい。
- 48) 「無我における絶対的平等と絶対的自由の相関関係」における絶対的自由の後行性についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間」(高澤2012)を参照してほしい。
- 49) 「絶対的平等と絶対的自由の相関関係」についての詳細は、拙論「社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間」(高澤2012)を参照してほしい。

[文献]

Georg Simmel, Grundfragen der Soziologie : Individuum und Gesellschaft, **1917** (=1979, 清水幾太郎訳『社会学の根本問題』岩波書店, 岩波文庫.)

Georg Simmel, SOZIOLOGIE. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung, Duncker & Humblot, Berlin, **1908** (=1994, 居安正訳『社会学』(全2巻) 白水社.)

Arthur Schopenhauer, Über die vierfache Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde, **1813** (=1972, ショウベンハウアー著, 生松敬三, 金森誠也訳(ショウベンハウアー全集第一巻) 白水社.)

Friedrich Wilhelm Nietzsche, Also sprach Zarathustra, **1883—1885** (=1966, ニーチェ著, 手塚富雄訳, 『ツアラトウストラ』(世界の名著46) 中央公論社.)

Jean-Jacques Rousseau, **1762**, *Du Contract social, ou principes du droit politique*. (=1966, 井上幸治訳『社会契約論』(世界の名著30) 中央公論社.)

Maslow, Abraham Harold, **1970**, *Motivation and personality*, second edition, Harper & Row. (=1987 小口忠彦訳『人間性の心理学』産能大学出版部.)

Olson, Carl, **2005**, "Original Buddhist sources" Rutgers University Press

中村元, **1994a**, 『中村元選集〔決定版〕第16巻 原始仏教の思想Ⅱ(原始仏教Ⅵ)』春秋社.

中村元, **1994b**, 『中村元選集〔決定版〕第22巻 空の論理 (大乘仏教Ⅲ)』春秋社.

仏教思想研究会編, **1975**, 『仏教思想1 愛』平楽寺書店. 中村元「第一章「愛」の理想と現実」26,27.

- 仏教思想研究会編, 1975, 『仏教思想 1 愛』平楽寺書店. 玉城康四郎「第十二章愛に関する新約聖書と原始經典」341—397.
- 高神覺昇, 1952, 『般若心經講義』角川書店.
- 山田無文訳, 1986, 『般若心經』禅文化研究所.
- 柳澤桂子, 2004, 『生きて死ぬ智慧』小学館.
- 玉城康四郎著, 1994, 『盤珪 (法語・説法)』講談社. 「盤珪禅師法語 (上・網干の巻)」68—71.
- 臨濟著, 入矢義高訳, 1989, 『臨濟録』岩波書店 (岩波文庫). 「上堂」20—1.
- 久須本文雄著, 2000, 『新装版・禅語入門』大法輪閣. 「五五・本来無一物」155—7.
- 佐藤文隆, 1979, 『宇宙の創成』紀伊國屋書店.
- 谷口義明, 2005, 『暗黒宇宙の謎—宇宙をあやつる暗黒の正体とは』講談社. ブルーバックス. 174—236.
- 谷口義明, 2006, 『宇宙を読む』中央公論新社. 中公新書. 163—70.
- 佐藤勝彦, 2010, 『インフレーション宇宙論—ビッグバンの前に何が起こったのか』講談社. ブルーバックス. 105—24.
- 編集部・赤谷拓和 協力: 駒宮幸男・岡野達雄・坂井建雄・湯本雅恵・家正則・末次祐介・佐藤文隆・佐々木真人, 2005, 「真空は無? その正体は?」『ニュートン (Newton)』(2005年8月号) ニュートンプレス.
- 高澤勇, 1997, 「社会化の原動力—体系の大要—」『長野経済論集第34号』長野経済短期大学学会.
- 高澤勇, 1998, 「社会化の発展」『長野経済論集第35号』長野経済短期大学学会.
- 高澤勇, 2006, 「社会化の最終目標」『長野経済短期大学論叢第43号』長野経済短期大学学術研究会.
- 高澤勇, 2009, 「社会化の最終目標への道」『信州豊南短期大学紀要第26号』信州豊南短期大学.

高澤勇, 2010, 「社会化における絶対的平等への道」『信州豊南短期大学紀要第 27号』信州豊南短期大学.

高澤勇, 2011, 「社会化における絶対的自由への道」『信州豊南短期大学紀要第 28号』信州豊南短期大学.

高澤勇, 2012, 「社会化における絶対的平等と絶対的自由の両立可能空間」『信州豊南短期大学紀要第 29号』信州豊南短期大学.

新村出編, 2008, 『広辞苑第六版』岩波書店.

The Way to the Absolute Love in our Socialization

TAKASAWA, Isamu

The aim of this paper is to know the way to the absolute love in our socialization . The conclusion of this study is the following. The essence of human is the same subject as an elementary particle. It is not a creature. It is a sort and a single one. By know this ,we can know the absolute equality in our socialization. Because, if the essence of human is the same subject as an elementary particle and it is not a creature and it is a sort and a single one, it is the same thing in point of all the essence of all human in the universe, and it is the same thing in point of all the essence of all living things in the universe, and it is the same thing in point of all the essence of all matters in the universe. Therefore , if we know it, we know that all human and all living things and all matters are the absolute equality in the universe.

If all human and all living things and all matters are the absolute equality in the universe, no one can control the others. Therefore , if all human and all living things and all matters are the absolute equality in the universe, all human and all living things and all matters are the absolute freedom in the universe.

If all human and all living things and all matters are the absolute equality in the universe, no one can envy or despise the others. Therefore , if all human and all living things and all matters are the absolute equality in the universe, all human is able to have the absolute love to all human and all living things and all matters in the universe.

If all human and all living things and all matters are the absolute

freedom in the universe, no one can envy or despise the others. Therefore , if all human and all living things and all matters are the absolute freedom in the universe, all human is able to have the absolute love to all human and all living things and all matters in the universe.

According to the contents above mentioned, the absolute equality is the cause of the absolute freedom and the absolute equality is the cause of the absolute love. Therefore , the absolute equality is always the cause of the absolute freedom and the absolute love. On the other hand, the absolute love is always the effect of the absolute equality and the absolute freedom. And the absolute freedom is the effect of the absolute equality, on the other side, the absolute freedom is the cause of the absolute love.

Then, where is the way to the absolute love? The essence of all human and all living things and all matters is the same subject as an elementary particle. It is not a creature. It is a sort and a single one. It is the true states of the universe. When we know it by our pure intuition, we know to reach the end of the way to the absolute love in our socialization. From this time, we know that the way of the absolute love in our socialization exists in the true states of the universe.

Keywords: socialization, absolute equality, absolute freedom, absolute love, an elementary particle, absolute peace

